

國學院大學學術情報リポジトリ

島根県松江市八重垣神社境内鏡池遺跡調査報告： 國學院大學伝統文化リサーチセンター考古学調査報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002001

國學院大學伝統文化リサーチセンター考古学調査報告

島根県松江市

八重垣神社境内鏡池遺跡調査報告

2010

國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト

例 言

1. 本報告は平成20（2008）年11月4日（火）～同6日（木）に國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡にみるモノと心」研究プロジェクト（責任担当者：杉山林継）が実施した、島根県松江市八重垣神社境内（鏡池遺跡）出土資料調査報告である。
2. ここに報告する資料は八重垣神社周辺から出土、採集されたもので、すべて同社に所蔵されている。
3. この調査には内川隆志（國學院大學伝統文化リサーチセンター准教授）、加藤里美（同講師）、阿部昭典（同客員研究員）、加藤元康（同PD研究員）、石井匠（國學院大學大学院特別研究員）、小西沙和（國學院大學大学院博士課程後期）、新原佑典（同）、朝倉一貴（國學院大學大学院博士課程前期）、楠恵美子（國學院大學文学部4年）が参加した。
4. この調査にあたり、調査指導をはじめ、島根県教育委員会から多大な協力を得た。
5. 本報告は加藤里美、新原佑典が編集し、実測図版作成は佐藤周平（國學院大學大学院博士課程前期）が、写真図版作成は新原が担当した。執筆者については目次に記載した。
6. 調査報告を作成するにあたり、以下の機関、諸氏よりご指導、ご協力賜った。記して感謝申し上げます（順不同、敬称略）。

佐草敏邦（八重垣神社） 松本岩雄（島根県立古代出雲歴史博物館） 錦田剛志（島根県神社庁）

黒崎寿政（島根県古代文化センター） 西尾克己（島根県古代文化センター）

岡田裕之（島根県古代文化センター） 柳浦俊一（島根県埋蔵文化財調査センター）

八重垣神社 島根県教育委員会 松江市教育委員会

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	(新原佑典) 147
第2節 調査の経過	(新原佑典) 147
第2章 八重垣神社と鏡池遺跡	
第1節 八重垣神社をめぐる地理的・歴史的環境	(佐藤周平) 148
第2節 八重垣神社略史	(加藤里美) 152
第3節 鏡池遺跡をめぐる調査研究史	(新原佑典) 154
第3章 調査報告	
第1節 八重垣神社鏡池周辺出土資料	(阿部昭典・新原佑典) 156
第2節 八重垣神社境内地測量調査	(朝倉一貴) 160
第4章 まとめ	(加藤里美・新原佑典) 161

挿図目次

第1図 調査風景	147
第2図 八重垣神社周辺の遺跡位置図	150
第3図 「八重垣神社遺物」(1) 甕・土馬	155
第4図 「八重垣神社遺物」(2) 須恵器	155
第5図 八重垣神社周辺地図	160
第6図 鏡池周辺地形測量図	160
第7図 鏡池と参拝者(北東より)	160

表 目 次

第1表 八重垣神社資料観察表	159
----------------	-----

図 版

図版1 八重垣神社資料実測図(1)	163
図版2 八重垣神社資料実測図(2)	164
図版3 八重垣神社資料実測図(3)	165
図版4 八重垣神社資料実測図(4)	166
図版5 八重垣神社資料実測図(5)	167
図版6 八重垣神社資料実測図(6)	168
図版7 八重垣神社資料実測図(7)	169
図版8 八重垣神社資料実測図(8)	170
図版9 八重垣神社資料実測図(9)	171
図版10 八重垣神社資料実測図(10)	172
図版11 八重垣神社資料実測図(11)	173

写真図版

写真図版1 八重垣神社資料写真(1)	174
写真図版2 八重垣神社資料写真(2)	175
写真図版3 八重垣神社資料写真(3)	176
写真図版4 八重垣神社資料写真(4)	177
写真図版5 八重垣神社資料写真(5)	178

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

國學院大学伝統文化リサーチセンター「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」は平成19年度文部科学省オープンリサーチセンター整備事業に選定され、3つの研究グループを組織して調査研究活動を実施してきた。特に「祭祀遺跡に見るモノと心」研究グループでは、日本文化の基層を探るため、考古学を中心とした学際的な研究によって、祭祀遺物（「モノ」）やそれらが用いられた祭祀環境と、過去の人々の宗教文化・生活文化（「心」）を解明することを目指してきた。当グループは当該研究分野の拠点となるべく、国内外の研究機関と連携しつつ、これまでの研究実績と膨大な祭祀関係資料を活かし、祭祀遺物から見た学際的研究、及び祭祀遺跡の景観研究を実施している。また平成21年度からは島根県教育委員会、英国セインズベリー日本芸術研究所と研究協定を結び、外部機関との連携ならびに共同研究等の実施によりその深化に務めている。

対象地域のひとつとして、島根県出雲地域を取り上げ、律令制の成立と『出雲国風土記』が編纂された時期を核として、祭祀考古学研究を行なっている。また8世紀代とされる、出雲市青木遺跡などの神社遺構の成立をひとつの画期とし、「固定化した祭祀の場の成立」としてテーマ設定し、これ以前の祭祀の様相を明らかにすることを目指している。これら調査研究の前提としてまず既知の祭祀遺跡、さらに島根全県遺跡の集成を行った。その中で神道考古学の鼻祖である大場磐雄が、全国の祭祀遺跡を概観する中で島根県においても多くの神社境内地出土資料を調査、報告していることから、神社境内出土資料の調査、研究を柱に位置付けることとした。

平成20年度には松江市佐草町八重垣神社を対象として、鏡池をはじめとする境内出土の資料を調査した。遺物の出土地点とされている鏡池は遺跡として登録されているものの、その規模、位置等は詳細に遺跡地図上にも反映されておらず、測量図の作成も重要な調査であり、資料調査と併行して、鏡池周辺の測量調査を実施した。

なお、八重垣神社においては「鏡の池」と称され、また文献によっては「鏡が池」等と記されているが、ここでは『島根県遺跡地図』の標記に従い「鏡池遺跡」として報告する。

第2節 調査の経過

事前協議

平成20年7月28日に八重垣神社を訪問し、錦田剛志氏（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（当時）の仲介によって、佐草敏邦宮司と会談した。会談では、当プロジェクトの趣旨と研究内容、秋季調査の目的等について説明し、神社所蔵資料調査を行うことに関して内諾を得、調査日程を決定した。また佐草宮司より、大場が報告した資料のほかにも多くの資料が神社に所蔵されていることや、神社周辺の地形環境について教示を得た。

調査

平成20年11月4日（火）から6日（木）にわたり、八重垣神社で調査を実施した。境内に作業場を拝借し、資料の水洗から、台帳作成、実測・拓本・写真撮影の調査を行った。同時に鏡池の地理的位置を把握するために境内地および周辺の地形測量を行った。また宮司、神社関係者、佐草町住民などから八重垣神社の祭りや周辺環境についての聞き取り調査も行った。



第1図 調査風景

第2章 八重垣神社と鏡池遺跡

第1節 八重垣神社をめぐる地理的・歴史的環境

松江市佐草町は宍道湖の東南部、島根県庁や松江市役所の所在する松江市中心部から大橋川を挟んで東南約5kmに位置する。北部から東部にかけて大庭町に、西部は東忌部町に、南部は八雲町に接する。馬橋川の源流域にあたり、大庭町との東部の境は意宇川の沖積により形成された意宇平野が広がり、南部には玉湯町から東出雲町へ連なる低丘陵が連なっている。古代には出雲国大草郷さくさに属していた。八重垣神社は丘陵の北端に位置し、馬橋川の支流である山口川を挟んで東岸に本殿が鎮座し、西岸に奥の院、そして鏡池がある。周辺地域には古墳や横穴墓をはじめ、多くの遺跡が分布する。ここでは八重垣神社周辺から東方の意宇平野にかけての遺跡を、時代別に概観する。

旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺跡の調査例は少ないが、採集資料を中心に確認されている。大庭町下黒田遺跡では玉髄および瑪瑙の石核と剥片の接合資料が出土している。山代町市場遺跡では黒曜石製の細石刃石核や玉髄製の石器が、また散布地であるが大草町の上立遺跡からは頁岩製の搔器かきが見つかっている。八重垣神社の北西、忌部川下流域にある乃木福富町廻田遺跡では玉髄製のナイフ形石器が、福富Ⅰ遺跡では黒曜石製の尖頭器が採集されている。

縄文時代の遺跡は、八重垣神社北方の古志原・上乃木、意宇平野北側丘陵縁辺に点在する。古志原には香ノ木遺跡、山代神社前遺跡があり、そこからは石鏃が採集されている。上乃木の下沢遺跡では石鏃などの石器類が、馬橋川下流の東津田町石台遺跡からは、後期・晩期の土器、扁平打製石斧や石錘・石鏃などの石器類が出土している。意宇平野周辺では、矢田町の法華寺前遺跡で前期から中期の土器が、才塚遺跡からは後期の土器や打製石斧が発見されている。そのほかの散布地では八幡町竹矢小学校校庭遺跡から前期の土器が、竹矢町の上小紋遺跡・向小紋遺跡・間内遺跡からは後期から晩期に位置づけられる土器が採集されている。

弥生時代

乃木福富町の欠田遺跡では、前期から後期までの遺跡で大型石庖丁などの石器や土器片が出土している。国指定史跡である乃白町田和山遺跡は、独立丘陵を3条の環壕で圍繞する前期末から中期後半の遺跡である。山頂部では9本柱の総柱掘立柱建物・総柱建物・柵列といった遺構が検出されている。遺物は壺・甕・高坏などの土器類、環状石斧・銅剣形石剣の破片などの石器類、黒曜石製・サヌカイト製の石鏃などのほか、環壕内からつぶて石が出土している。田和山遺跡の北に位置する浜乃木の友田遺跡では、前期～中期の土壇墓群、中期の墳丘墓群と後期前半の四隅突出型墳丘墓が検出されている。乃木福富町の廻田遺跡では後期後半の円形堅穴住居跡、福富Ⅰ遺跡では後期の堅穴住居跡、門田遺跡では中期中葉から後期の溝状遺構が検出され、雲垣遺跡では田下駄を中心とした木製品が出土している。大庭町の黒田畦遺跡や古志原の向山西遺跡でも後期の住居跡が見つかっている。

意宇平野は多く弥生時代の遺跡が分布する地域である。竹矢町の布田遺跡では、鋏・弓などの木製品や多数の土器のほか、銅鐸形土製品や分銅形土製品が出土している。八束郡東出雲町の夫敷遺跡や上小紋遺跡、向小紋遺跡では後期の水田遺構が検出され、間内遺跡では粘土採掘坑が検出されている。また松江市竹矢町の平浜八幡宮には、意宇平野から発見されたと伝えられる細形銅剣が所蔵されている。

古墳時代

古墳時代は意宇平野を中心に多数の墳墓が確認されている。前期には平成町袋尻遺跡群の4号・7号・8号墳があり、このうち4号墳と8号墳から合わせ口の土器棺が出土している。中期になると方墳・円墳7基の古墳から構成される乃木福富町大角山古墳群があり、その中でも1号墳は全長61.4mの前方後円墳である。造り出しを有し、墳丘裾から円筒埴輪片が出土している。上乃木の長砂古墳群は方墳・円墳16基から構成される古墳群で、そのほとんどが墳丘盛土の上層に不整形な長方形土壇を掘りこむことが特徴的である。鉄器類、玉類をはじめ土器では甕が6個体出土している。

後期になると前期・中期に比してより多くの古墳が造営される。特に意宇平野には大型墳墓が、平野をとりま

く丘陵部には多数の横穴墓が造成される。

茶臼山北西麓の山代古墳群は5世紀末から7世紀初頭に造営された大形の方墳・前方後方墳からなり、当該期における東部出雲累代の首長墳と考えられている。馬橋川右岸の舌状台地の先端に立地する大庭鶏塚古墳は、現状規模は一辺40mであるが、本来は一辺45mの方墳であったと推定される。須恵器片と埴輪片が出土しており、須恵器の特徴から5世紀末から6世紀前半頃に築造されたと考えられている。山代二子塚古墳は、出雲地域で最大規模を誇る二段築成の前方後方墳である。明治時代に後方部東側の約3分の1が削平され、現存の墳丘長は56mであるが、推定では墳丘長92m、周溝・外堤を含めると全長150mであったとされる。墳丘に円筒埴輪がみられ、葺石も確認されている。くびれ部からは出雲型子持壺や着色のある人物埴輪片などが出土している。後方部の北寄りに石室があると推測されている。築造年代は須恵器の年代から6世紀中葉と考えられる。山代方墳は、山代二子塚古墳の東約100mに位置する大型方墳で、一辺45mほどの正方形を呈する。埋葬施設は墳丘南側に開口する石棺式石室である。玄室内には有縁石床が破損した状態で残されている。墳丘の内側や堀の中から須恵器の出雲型子持壺と円筒埴輪片が出土している。6世紀末から7世紀初頭に造られたと考えられ、山代二子塚古墳の次代の大型墳墓と考えられている。山代方墳から南東に永久宅後古墳（旧山代円墳）がある。墳丘は失われ、石棺式石室が露出している。前室は床石を残すのみである。

山代古墳群の周囲にはいくつかの古墳群が認められる。大草町には有古墳群が造営される。御崎山古墳は墳長40mの前方後方墳で、石室内より鏡、大刀、馬具、須恵器の坏蓋・甕・高坏・壺などが出土し、墳丘上からは須恵器の甕片や円筒埴輪が見つかった。築造時期は6世紀後半頃と考えられる。岡田山1号墳は横穴式石室を主体部とする前方後方墳である。御崎山古墳に後続する6世紀後半の築造とされる。石室から大刀、鉄器、馬具、鏡、須恵器の短頸壺・甕・高坏などが、墳丘からは円筒埴輪が出土している。特に4振の大刀のうち1振の円頭大刀には銀で象嵌された「各田□臣□□素□大利□」の文字がみえ、『出雲国風土記』の大原郡条に記される「額田部臣」との関係が注目される重要な資料である。続く岩屋後古墳は墳丘が失われ、出雲最大の規模を有する石棺式石室が露出している。出土遺物には明治時代に出土したと伝えられる人物埴輪のほか、円筒埴輪、須恵器の甕などがある。有古墳群は山代古墳群の被葬者を補佐した一族の古墳であると考えられる。

古志原町の向山古墳群にある向山1号墳は東西約32m、南北20m以上の方墳と推定され、石棺式石室を主体部とする。墳丘の裾近くから出雲型子持壺の破片が多数出土している。古墳基盤面で土師器と青瑇瑁が一緒に見つかり、古墳築造に際して行なわれた祭祀の痕跡とみられている。副葬品は大刀の飾金具、馬具、鉄鏃、弓の飾金具、矛の石突、玉類、須恵器の蓋・甕・提瓶・長頸壺・有蓋高坏などがある。6世紀末頃に築造されたものとみられる。

大庭町東淵寺古墳は、八重垣神社の鎮座する大庭地区の唯一の前方後円墳である。復元全長62mで、主体部は横穴式石室と考えられている。発掘調査を経ていないが、遺物に須恵器の蓋坏・高坏・子持壺・甕片、円筒埴輪などがあり、6世紀後半の築造とされる。

このように意宇平野には大型の古墳が造営される一方で、横穴墓も密に分布する。山代町の狐谷横穴墓群は30穴以上の横穴墓から構成されていると推定される。内部に組合せ式石棺や組合せ横口式家形石棺、床に須恵器・甕の破片を敷く須恵器屍床のあるものがある。3つの横穴墓の玄室壁面に狩人、動物などの線刻壁画がある。線刻壁画のある横穴墓の例は、島根県内でも数は少ない。出土遺物には須恵器の蓋坏・高坏・壺・甕などがある。およそ7世紀前半に造られたとされる。狐谷横穴墓群の東、矢田町には十王免横穴墓群がある。合計37穴の発掘調査が行われ、横穴墓群は丘陵斜面の上下二段に造られている。横穴墓の中には家形石棺を置くものと須恵器屍床のものがある。狐谷横穴墓群と同様に人物、弓、船などの線刻壁画のあるものが見つかった。出土品には須恵器の坏・壺・甕・高坏・提瓶や大刀などがある。築造年代は7世紀前半とされる。乃木・乃白地域では副葬品として須恵器や鉄器が出土した乃白町の菅沢谷横穴墓群のほか、弥陀原横穴群、浜乃木の奥山遺跡、平成町の袋尻横穴群、乃木福富町の松本横穴群、大庭町小倉見谷横穴群が存在する。これらは7世紀前半の造営である。

八重垣神社周辺にも多くの横穴墓が確認されている。神魂神社から八重垣神社鏡池が位置する丘陵地に所在す



- | | | |
|-----------------|----------------------|--------------------|
| 1. 八重垣神社 (鏡池遺跡) | 21. 向山西遺跡 | 41. 布志名大谷 I 遺跡 |
| 2. 下黒田遺跡 | 22. 布田遺跡 | 42. 大庭鶏塚古墳 |
| 3. 市場遺跡 | 23. 夫敷遺跡 | 43. 山代二子塚古墳 |
| 4. 廻田遺跡 | 24. 東淵寺古墳 | 44. 山代方墳 |
| 5. 福富 I 遺跡 | 25. 空ノ原古墳 | 45. 永久宅後古墳 (旧山代円墳) |
| 6. 香ノ木遺跡 | 26. 大石古墳群 (神魂神社裏山古墳) | 46. 狐谷横穴群 |
| 7. 山代神社前遺跡 | 27. 大石横穴群 | 47. 十王面横穴群 |
| 8. 下沢遺跡 | 28. 荒神谷・後谷古墳群 | 48. 向山西古墳群 |
| 9. 石台遺跡 | 29. 小倉見谷横穴群 | 49. 向山 1 号墳 |
| 10. 法華寺前遺跡 | 30. 袋尻遺跡群 (菅原谷横穴群) | 50. 岡田山古墳群 |
| 11. 竹矢小学校校庭遺跡 | 31. 大角山古墳群 | 51. 岩屋後古墳 |
| 12. 上小紋遺跡 | 32. 長砂古墳群 | 52. 御崎山古墳 |
| 13. 向小紋遺跡 | 33. 田和山 1 号墳 | 53. 出雲国府跡 |
| 14. 間内遺跡 | 34. 松本古墳群 | 54. 出雲国分寺跡 |
| 15. 欠田遺跡 | 35. 奥山遺跡 | 55. 出雲国分尼寺跡 |
| 16. 田和山遺跡 | 36. 松本横穴群 | 56. 出雲国分寺瓦窯跡 |
| 17. 友田遺跡 | 37. 弥陀原横穴群 | 57. 出雲国山代郷正倉跡 |
| 18. 門田遺跡 | 38. 大角山遺跡 | 58. 来美廃寺 |
| 19. 雲垣遺跡 | 39. 乃白玉作遺跡 | 59. 四王寺跡 |
| 20. 黒田畦遺跡 | 40. 福富 II 遺跡 | 60. 小無田 II 遺跡 |
| | | 61. 出雲国造館跡 |

第2図 八重垣神社周辺の遺跡位置図

る古墳には、東淵寺古墳、空ノ原古墳、万居堤南古墳、大石古墳群（神魂神社裏山古墳）、大石横穴群、荒神谷・後谷古墳群と鏡の池裏山古墳群がある。佐草町の荒神谷・後谷古墳群は、八重垣神社から東へ300m、山道を通じて大石堤へ向かう丘陵に位置する古墳群と横穴墓群である。古墳群は方墳およそ20基が丘陵の尾根上に連なって築かれている。調査されたうち1基の主体部から刀子・鏃、須恵器の蓋坏が副葬品として出土した。須恵器の年代は6世紀前半頃のものとする。横穴墓群は丘陵の斜面に広がり、20穴以上が存在すると考えられている。4穴が調査され、副葬品として須恵器の蓋坏・蓋付壺、耳環、切子玉・ガラス白玉・ガラス小玉などの玉類、刀子・鏃など鉄器がある。6世紀後半から7世紀代のものとなっている。鏡の池裏山古墳群は、八重垣神社奥院、鏡池の裏山にあり、一辺10mほどの数基の方墳と丘陵斜面には横穴墓群がつくられている。横穴墓群は未開口であるが、鏡池出土資料を考える上で重要な遺跡である。

古墳時代の集落については、墳墓ほど様相は明らかではないが、宍道湖南岸、八束郡玉湯町の花仙山を背景とした忌部川、玉湯川流域に玉作遺跡が多く分布する。意宇平野はじめ、宍道湖東南岸にも玉作遺跡は確認でき、乃木福富町大角山遺跡は、竪穴式住居跡5棟が検出された中期の遺跡で、土師器とともに碧玉製勾玉・管玉製未製品・瑪瑙製勾玉未製品、内磨砥石などが出土している。乃白町の乃白玉作遺跡、乃木福富町の福富Ⅱ遺跡などが確認されている。また玉湯町の布志名大谷Ⅰ遺跡からは製鉄関連の炭窯といわれる横口付炭窯が発見されている。他に松本古墳群からは、丘陵を切り通して築造した道路遺構が検出され、この道路遺構は『出雲国風土記』に記載のある古代山陰道「正西道」の推定ルートを通っている。文献資料との検証の上に参考とされる資料である。

歴史時代

八重垣神社の周辺の遺跡で、歴史時代の遺跡は意宇平野の周辺に集中して分布する。古墳時代に遺跡の広がりを見せた意宇平野周辺は、国府跡や国分寺跡・国分尼寺跡など古代出雲国の中心地でもある。出雲国府跡は六所神社の北側に位置する。遺構は重複しており、7世紀頃から9世紀頃まで存続する。出土遺物には文字の書かれた木簡、墨書土器、瓦、硯、分銅や大量の須恵器・土師器が出土している。また5号土坑の遺物出土状況から釈奠の可能性も指摘される祭祀行為の痕跡がみられ、須恵器や土師器を扱った祭祀について窺える資料である。出雲国分寺跡・出雲国分尼寺は意宇平野北東部の低丘陵南に位置する。軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦や須恵器、土師器、墨書土器などが国分寺跡から、瓦類、須恵器、土師器、陶磁器、土馬と墨書土器などが国分尼寺から出土している。また両遺跡の間にあたり、国分寺跡から東に出雲国分寺瓦窯跡がある。意宇平野の西端、茶臼山の北西麓に出雲国山代郷正倉跡がある。掘立柱建物跡数棟があり、4つ以上の倉庫群があったと推測される。炭化米が出土している。『出雲国風土記』の意宇郡山代郷の正倉跡と記載が一致する遺構として注目され、南に位置する下黒田遺跡からは掘立柱建物跡や大溝などが検出されており、一連の遺構群と考えられている。『出雲国風土記』の新造院跡として来美廃寺や四王寺跡が知られている。山代郷北新造院に比定される矢田町の来美廃寺は、茶臼山北麓、細長い谷の奥に支丘となっている来美丘陵の南側斜面に位置する。金堂跡から須弥壇が検出され、遺物として瓦・鴟尾片、須恵器の高坏・甕片・土師器などが出土されている。山代郷南新造院の推定地である山代町の四王寺跡は、茶臼山の南麓に位置する。瓦溜り、溝、柱穴跡などが検出され、方形で周囲に三段以上の石積みをした基壇も確認されている。出土遺物には多量の瓦類、仏像の髻髪、須恵器の甕・坏・壺などがある。また同じく山代町の小無田Ⅱ遺跡からは四王寺の瓦を焼いた登り窯が検出されている。平野の西側の微高地では、出雲国造館跡が知られている。大形掘立柱建物跡や井戸跡、溝などが検出され、土師器、須恵器などが出土している。

第2節 八重垣神社略史

八重垣神社所蔵資料の性格を探る一助とするため、史料にみられる八重垣神社について簡述する。

八重垣神社は現在松江市佐草町に鎮座するお社で、素盞鳴尊命と櫛稲田姫を主祭神とし、大己貴命・青幡佐久佐丁社命を配祀する。また、「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」⁽¹⁾が名の由来として広く知られている。現在では、櫛稲田姫が御姿を整えるために鏡として使われた池とされる鏡池に紙を浮かべる婚姻占が盛んで多くの参拝客が訪れている。明治時代から昭和時代初期頃と推測される絵葉書には、和服の女性が池の水面に半紙を浮かべる写真が使用され⁽²⁾、また昭和39年の収蔵になると考えられる大場磐雄博士資料の中に「鏡が池占い」と題した絵葉書があり⁽³⁾、当時から多くの参詣者が訪れていたことがうかがえる。

宝物館には、もと本殿内の板壁画であった重要文化財「板繪著色神像」が展示されている。向かい合う2人の女性像と男女2人の像が描かれ、また裏面に「天文十□□」の文字がみえることから室町時代から鎌倉時代頃の作とされる。

「八重垣」社の語は永禄8（1565）年の「毛利元就判物」（『出雲国造家文書』所収）⁽⁴⁾に「山代郷内伊弉册伊弉諾・八重垣神楽田壹町七反之事合領掌候」とあるのを初見とし、その後天正18（1590）年の「注進状」に至ると、「八重垣社領」「八重垣別火」という語句が現れるようになる。この時期に至って、八重垣という語句が使用され、八重垣社が大原郡から遷り当該地域に存在していたことがわかる。

承應2（1653）年の『懷橘談』には「佐久佐の里に八重垣の明神在す。佐久佐の社一所とあるは是なるべし」と記し、『出雲風土記抄』には「佐久佐社、大草村八重垣大明神」⁽⁵⁾と、佐久佐社は即ち大草村の八重垣大明神であると記している。さらに佐久佐社については『出雲神社巡拝記』⁽⁶⁾に「當社ハ小社と成て此所八重垣神社のわきにあり。是也。末社の如く小社なれば、八重垣神社を是と拝する人あらん。巡拝の人は心得を以拝禮すべし」とあり、佐久佐社は八重垣神社の境内社となって存続していたことが推測される。

また八重垣神社の遷座について、次のような記載がある。『雲陽誌』⁽⁷⁾には、須我社の条で「須佐能男尊八岐大蛇を斬たまひ、遂に此須我の郷にいたり、吾心□々之（小文字）と曰。彼處に宮を建、伊奈多比賣とすなはち溝合□之湯山主命を生たまふ所なり。其後意宇郡佐草村に遷たてまつり、八重垣の神と申なり」とある。また、『出雲風土記抄』に大原郡海潮郷須我社の説明として「素戔尊為稲田姫既殺八岐大蛇、已還来此里。素尊詔。我心清々。遂ニ作宮娶稲田姫。生御子。号曰須我湯山主命其湯山主命者与大己貴異名同命成り。故ニ合祭彼三神於此里。曰須我社是也。纂疏曰。清之湯山主者出雲清地有温泉、故為名。往古者在之三社于此地、後良方法四里許、從意宇郡佐草村。今ノ八重垣是也。」⁽⁸⁾とあり、八重垣神社が大原郡海潮郷の須我神社であった由来を記し意宇郡に移動してきたことを示唆している。ここから詳細な遷座時期を確定することは不可能であるが、おおよそ中世の時期であったと考えることができよう。つまり、もともと大原郡にあった佐久佐社は大原郡海潮郷の社である八重垣社をその地に迎えた。その後八重垣社が隆盛し、佐久佐社は小社となって八重垣神社の脇に鎮座していると解釈することができる。

近世史料にはこの他にも八重垣神社の名称は多く見られ、特に意宇六社として国造とのかかわりを強く持っていることがうかがえる。意宇六社とは、旧意宇郡の東部、現在の松江市の南郊・八東郡東出雲町・同八雲村の地域に鎮座する式内名神大熊野大社、神魂神社、真名井神社、六所神社、八重垣神社、掛夜神社の六社をいうものである。これらの神社はともに出雲国造家と格別のかかわりを持つ神社であるが、六社の文字は『雲陽誌』にも見えず、天明7年（1787）の『出雲風土記解』にも現れない。文献上で最も早くにこの語がみられるのは、『出雲神社巡拝記』意宇郡揖屋村揖屋大明神の条に、「又爰に意宇六社とへ有。其一ツ也。六社とハ当社及熊野大社、大庭かもしの社、山代いざなぎの社、佐草ノ八重垣、大草の六所神社是也。巡拝の人、格別の社なれば、一□心をとめて拝礼すべし。」と記されているものである。さらに、以下佐草村八重垣大明神・大庭村神魂大明神・山代村伊弉諾大明神・熊野村熊野大神宮の条に、それぞれ「当社ハ意宇六社の一ツ也。巡拝の人、序なれども心をこめて格別に拝礼すべし」と記している。このように、この記述は幕末のころに至って初めて出てくるが、この六社を格別の社として扱うのは、元禄・宝永ごろまでは遡ることができるようである。従って「意宇」という語

はないものの、「六社」「六社神主」という語は、「秋上家文書」の宝永6（1709）年のものと考えられる「奉願口上覚」と称する断簡に見られるのが初出とされている。また、『出雲神社巡拝記』巻之十には、

記 式 祭 當社古ハ三代實録に、陽成天皇元慶元年春
佐草村、佐草台明神、云、佐久佐社、云、佐久佐神社、神、あをはたさくさひこの命、三月丁酉、出雲ノ國正五位下青幡佐久佐比古
ノ神ニ正五位ヲ授くと有、當社今ハ小社と成りて此所八重垣神社のわきにあり、是也、末社の
如く小社なれハ八重垣神社を是と拜する人もあらん、巡拜の人其心得を持拜禮すべし、 次十二丁、

と記されており、「小社と成りて此所八重垣神社のわきにあり」の箇所からわかるように佐久佐社は戦国末には八重垣神社の社と隣、ないしはごく近い場所にあり小社となっていたと考えられる。佐草村については、続けて次のような記載がある。「同所、八重垣神社大明神、祭 神、いなたひめの命、當社ハ意宇六社の一つ也、巡拜の人、序でなれども心をとめて格別に拜禮すべし、當社数多由来有事也、志あらん人は社家に付て悉ふ問尋ぬべし、神跡なり（以下略）」このように、八重垣神社は近世には上記のごとく他の社と同様に国造家と密接な係りを持つ社として度々登場しているが、明治維新となり神社の社格を決定する際に最も古い名称をもつ佐久佐社・御祭神である青幡佐久佐社丁命と登録し八重垣神社を合祀するとあり、一時期には佐久佐社と名乗るが、後の大正11（1922）年9月にはさらに名称変更を行なって再び八重垣神社に戻し、県社に昇格している。

上記述べてきたことにより、八重垣神社が鎮座する場所を佐久佐社の鎮座地と批定するに至った。では、八重垣神社が進出した地に祀られていた佐久佐社とは如何なる社であろうか。

『出雲国風土記』⁽⁹⁾には「意宇郡 大草郷 郡家南西二里一百二十歩。湏佐乎命御子青幡佐久佐丁社命坐。故、大草云」と記されおり、この地の神が湏佐乎命御子青幡佐久佐丁社命であることが示されている。また、社の条には在神祇官社が48社、不在神祇官社が19社記されている。この中で佐久佐社は在神祇官社に列せられており、その場所も国府から南西に約1.3km、現在の松江市大草町、佐草町から八束郡八雲村一帯がこれに当たる。さらにいくつかの史料において八重垣神社境内に佐久佐社が祀られていると見える点からも、現在の八重垣神社が鎮座する場所はほぼ佐久佐社の鎮座地と推定することができる。『文徳実録』仁寿元（891）年9月乙酉の条には出雲国青幡佐草社丁命に従五位を授けくとあり、『三代実録』貞観7（865）年十月廿八日丙子の条には従五位下佐草神に従五位上を授く、同十三年十一月十日壬午の条に、従五位上の佐草神に正五位下を授く、また元慶2（878）年三月三日己亥の条に、出雲国正五位下青幡佐草社丁神に正五位上を授く、とある。正五位上よりも上には杵築大社、熊野大社などの大きな社が名を連ねるのみで、それに次ぐ位階を受けていることからすると、中世にいたって八重垣神社が遷座し、御祭神が素盞鳴尊・稲田姫命と変化する以前に佐久佐社の神が重要な地位を占めていた時期があったことを示している。

上記の点から、今回調査対象とした八重垣神社所蔵資料のうち、鏡池から御本殿、拝殿、宮司宅周辺の一帯から出土ならびに採集されたものについては、風土記や延喜式にも見られる佐久佐社が鎮座した地から出土したと考えられ、社にまつわるまつりに用いられた可能性を指摘できよう。

註

- (1) 『日本書紀』巻第一 神代上 第八段本文による。
- (2) 『神社新報』2008年11月3日「絵はがきに見る社頭のいま昔」より
- (3) 2010『大場磐雄資料目録Ⅱ』國學院大學伝統文化リサーチセンター
- (4) 1993『出雲国造家文書』青文堂出版
- (5) 2000「意宇六社便覧」『出雲の国神社史の研究』より抜粋。
- (6) 2006「出雲神社巡拝記」『続神道大系』神道大系編纂会
- (7) 1930『雲陽誌』享保2年（1717）雄山閣出版
- (8) 註5に同じ。
- (9) 加藤義成1988『出雲国風土記』今井書店

第3節 鏡池遺跡をめぐる調査研究史

『島根県遺跡地図』⁽¹⁾には「鏡池遺跡」として、『島根県の地名』⁽²⁾には「鏡ノ池遺跡」として報告されている。現状では『島根県の遺跡』の記載が鏡池遺跡の理解に適切であるため、これに基づきながら鏡池遺跡の調査研究史について概観する。

鏡池遺跡は低丘陵の北麓に位置し、八重垣神社奥院、佐久佐女の森に所在する祭祀遺跡である。鏡ノ池はおよそ東西6m、南北7m、深さ1m余の湧水池である。社伝には奇稲田姫が八岐大蛇の難を避ける為に八重垣を作って避難した際に飲料水とし、また水面に姿を映して美容調整をしたとされ、干天が続いたときにも水の涸れることがなかったという。現在、鏡ノ池では和紙の上に硬貨を載せて浮かべ、沈んだ位置の遠近や方向、浮遊時間の長短で男女の縁を占う場所として多くの参拝者で賑わっている。

大場磐雄の鏡池調査

鏡池遺跡について最初に報告したのは國學院大學教授であった大場磐雄である。論考としての初出は昭和10(1935)年の「池中の鏡(2)」⁽³⁾である。ここで羽黒山鏡ヶ池や赤城山小沼の出土鏡を中心に論を展開し、類例として八重垣神社「鏡ノ池」に触れ、写真を付して出土の須恵器、土馬を報告し、池沼に対する信仰の一例として紹介している。この資料は昭和9年に調査したもので、大場の調査記録誌『楽石雑筆』のなかにまとめられている。資料の状況等がよくわかる記録であるため、長文になるがここに引用しておく。

『楽石雑筆』巻11：昭和9年10月19日条⁽⁴⁾

「…八重垣神社行バスに乗り、先づ八重垣神社に着く。神官佐草社司久しぶりにて面会、先づ参拝す。(中略)それより同氏の案内にて神跡を見る。まづ本殿の裏、田を越ゆれば奥の院に入る。こゝに小石橋あり、もと大上川流れいたり。間もなく夫婦杉に出づ、今の杉は玉垣を以囲みたり。その前に杉の巨大なる株あり、これ大杉跡にして八重垣姫が神代の頃この地に身を隠し給い、付近に八重垣を築きて居られたりという(今八重垣の名付近溪谷の小字に在すと)。毎年五月三日夕方より夫婦杉の前にて、身隠神事なる特殊神事を行う。即ち諸神に紛せる舞人等が一種の神能を行うものにて古来より行われ来れりという。今夫婦杉には多数の紙つぶて固着せり。右は鏡池に沈めし半紙が沈まざりし時そこに擲めて去る風あるに由ると。夫婦杉の北数十里にして鏡池に到る。溪谷の麓に湧水の存するものにして四、五坪の広さなり水澄みたり、往古御祭神が御影を写されしに起るという。今は玉垣を囲らし諸人の参詣引もきらず、即ち縁結びの呪をなす、白紙を浮べて銭を上のにのせて投じ、その沈み方によりて卜う。速く沈めば縁早し、また近くに沈まば近所より、遠くに沈まば遠方より縁ありという。沈まざれば縁なしとて忌む、今も銅貨歴々として数うるを得べし。こゝは四年に一度づゝ水を替う。その際祝部式土器、土馬類多数出土せりという。いと興味深し、なお又池の後方(東北)なる溪谷(俗に八重床)よりも多数の斎瓷類を出土せり。勿論古墳の存在は認められず何れも上代の祭器なるべし。社務所に戻り、こゝにて玉椿の葉を見る。これは近くの玉椿に生ずるものにして二葉重なりて存するもの。右は寿神、左は稲田姫とし、婚礼の際それを盃にかざして盃事をなし、或は結納の中に入れる等大に珍重がらるゝものとぞ、毎年その生ずる数一定せず。或は多く或は少なし。この数によりて又毎年縁結の吉凶をも卜うという。次に佐草社司宅を訪いて池中発見の遺品を見る。先づ見るべきは土馬なり、頸以上を欠きしも写真的のものなり。次に斎瓷類には小形蓋、埴、高坏、甗等多く、又大形の甕、平居瓶等も存せり、概して小形品の多くは注目すべきなり。」

この文章は山陰地方調査旅行に島根県内の神社、遺跡を踏査した際の記録で、八重垣神社の境内を官司の案内の下に踏査し、併せて出土資料を見学した際の所見が記されている。この時既に「土馬」や「祝部式土器」類が出土していることが分かる。この調査をもとにして以後、水中に道具を投じる水霊信仰に係る祭祀遺跡として位置づけ、「上代馬形遺物に就いて」⁽⁵⁾や「赤城神の考古學的考察」⁽⁶⁾、『祭祀遺蹟』⁽⁷⁾等の諸論考に度々紹介している。特に「赤城神の考古學的考察」には、大場の八重垣神社鏡池に対する位置づけが端的に表れていると言える。

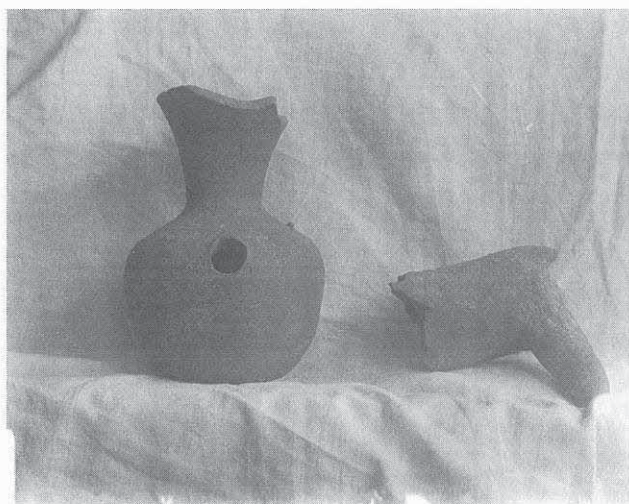
『出雲国八束郡大庭村八重垣神社境内鏡池』

本社は祭神稲田姫の御神蹟とされ、鏡池は同神が御姿を映し給うた所と伝えている。現在では縁結びの池とも称せられ、男女良縁を祈るもの遠近より参拝する。その方法は白紙を池中に浮べ、その上に銭をのせ沈降の程度によって吉凶運速を占うもので、一種の銭占である。先年同池を改浚した砌、中から多数の銭と、原史時代に属する須恵器の類及び土製馬形残片等が発見され、今同社に所蔵されている。因みに本社は延喜式の佐久佐神社に当る地方の古社である。故に池に対する信仰も原始期から存在したことは遺物の発見とともに首肯し得らるる所で、それが後世素神と稲田姫の故事から導かれ、一転して現存の習俗を発せしむるに至ったものであろう。」

また調査に際して撮影したガラス乾板が、國學院大學に収められており、國學院大學学術フロンティア事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」⁽⁸⁾により、國學院大學が所蔵する大場が調査した八重垣神社資料のガラス乾板写真が公開されている（第3図、第4図）。

大場の著作を契機として鏡池遺跡の存在が周知され、戦後になって全国の祭祀遺跡がまとめられる中で「祭祀関係遺物出土地地名表」⁽⁹⁾や『古墳時代の祭祀』⁽¹⁰⁾、「山陰地域の土馬集成」⁽¹¹⁾等の集成において土馬出土の祭祀遺跡として一覧表中に記載されているが、その実測図や写真については報告されておらず、資料の実態は不明であった。

そこで今回、國學院大學伝統文化リサーチセンターが資料の詳細を調査、報告するに至ったものである。



第3図「八重垣神社遺物」(1) 甕・土馬



第4図「八重垣神社遺物」(2) 須恵器

註

- (1) 島根県教育委員会2003『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ』出雲・隠岐編
- (2) 1995『島根県の地名』平凡社
- (3) 大場磐雄1935b「池中の鏡(二)」『歴史公論』第4巻第9号 雄山閣
- (4) 1976『楽石雑筆(中)』(大場磐雄著作集7) 雄山閣
- (5) 1937『考古学雑誌』第27巻第4号
- (6) 1935『考古学雑誌』第25巻第1号、第2号(「赤城山神蹟考」として『神道考古学論攷』に改題、再録)
- (7) 1970『祭祀遺蹟』角川書店
- (8) 國學院大學学術フロンティア推進事業2005『大場磐雄博士写真資料目録』Ⅰに収録。
第3図: ob0753、第4図: ob0754
現在は國學院大學デジタルミュージアム<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>にて公開。
- (9) 国立歴史民俗博物館「祭祀関係遺物出土地地名表」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集
- (10) 松本岩雄1993「島根県」『古墳時代の祭祀』東日本埋蔵文化財研究会
- (11) 内田律雄・岩橋康子・藤原 哲2005「山陰地域の土馬集成」『島根考古学会誌』第22集 島根考古学会

第3章 調査報告

第1節 八重垣神社鏡池周辺出土資料

八重垣神社に所蔵されている資料は、破片を含め総点数96点で、縄文土器、須恵器、土師器、陶器、土製品（支脚、土馬）であった。

資料は本殿、重要文化財板絵著色神像を展示する宝物殿、社務所、宮司宅に分けて保管されていたものである。土馬は本殿にケースに収められ、須恵器類は2箱の段ボール箱に納められていた。資料の来歴には不明な点が多いが、概ね昭和30年代の鏡池改浚工事の際に出土したものと、神社周辺で採集されたもので構成されると考えられる。

以下に資料の概要を報告する。

須恵器

坏蓋（図版1-1） 輪状つまみを有する坏蓋。内外面ともにナデ調整。口縁端部はやや内傾し、凹線を施す。天井部静止糸切り後、つまみを貼り付け、ナデ調整を施す。第1図3、第1図6の資料と異なり、輪状つまみは外へ開く形状をなす。

蓋（図版1-2） 頂部につまみを有する蓋で、短頸壺の蓋になるものと考えられる。蓋部は轆轤成形、回転ナデによる造作である。つまみ部は手捏ね成形ののち、蓋部と接合している。接合部は丁寧にナデ調整が施されている。

坏蓋（図版1-3） 輪状つまみをもつ坏蓋。内外面ともにナデ調整。天井部静止糸切り後、つまみを貼り付け、接合部分をナデ調整。輪状つまみの付け根部分に浅い割りこみを有する。口縁端部は垂直に立ち上がるが、その部分に凹線をめぐらせる。

坏蓋（図版1-4） 坏蓋。内面には強いナデ調整。口縁端部の内側にナデを施すことにより、ゆるやかな段状となる。外面肩部には2条の沈線を施し、ナデ調整を行なうことにより突帯様の稜がめぐる。天井部は回転ヘラ切りと考えられる。肩部には骨滲みとみられる白色付着物がある。

蓋（図版1-5） 口縁部ナデ調整、底部糸切り後、輪状つまみ貼り付け。

坏蓋（図版1-6） 輪状つまみをもつ坏蓋。内外面ともにナデ調整。天井部静止糸切り後つまみを貼り付け、接合部分をナデ調整。輪状つまみの付け根部分に浅い割りこみを有する。口縁端部は垂直に立ち上がるが、その部分に凹線をめぐらせる。第1図3の資料に酷似する。

坏（図版1-9） 轆轤成形、回転ナデ調整により成形。口縁端部の内側を欠くが、口縁部はやや内傾する。底部は糸切り後、ナデ調整。焼成はやや甘い。

坏（図版1-7） 底部と身の立ち上がり部分に粘土紐の積み上げ痕跡を残す。内外面回転ナデ調整。底部はヘラ切りになるものと考えられるが、ナデ調整を施し切断痕跡を消している。器壁が若干薄い点を除けば、第1図11の資料に酷似している。

坏（図版1-11） 底部と身の立ち上がり部分に粘土紐の積み上げ痕跡を残す。底部はヘラ切りになるものと考えられるが、ナデ調整を施し切断痕跡を消している。外面の器壁がやや荒れているものの焼成は良好である。

坏（図版2-16） 轆轤成形、回転ナデ調整により成形後、ヘラ切りを行なう。底部はナデ調整を施し、高台部の貼り付けを行なう。底面に「八16」の墨書注記あり。

坏（図版2-13） 轆轤成形、回転ナデ調整により外面は横位のナデ、内面は縦位のナデを施す。内面底はやや隆起する。底部はヘラ切り後、高台部を貼り付け、高台縁辺をナデ調整。

高台付坏（図版1-8） 轆轤成形、回転ナデ調整を施す。ヘラ切り後、ナデ調整を行ない、高台部を貼り付ける。高台縁辺の外面側を丁寧になで調整している。胎土は緻密であり、焼成は良好、色調は青灰色を呈する。青海波文

高台付坏（図版1-12） 白色粒子を多く含むが胎土は緻密で焼成は良好、色調は青灰色を呈す。成形、調整はロクロナデ、回転糸切り後、底部ナデ調整。のち高台部を貼り付ける。底部にヘラ記号「×」あり。

高台付坏（図版1-10） 回転糸切り後、ナデ調整を施し高台貼り付け。底部にヘラ記号「×」あり。

高坏（図版2-14） 脚部に透かし様の沈線を3条有する。坏部の立ち上がりは急で、頸部と坏下半部に1条の凹線が

めぐる。坏部と脚部の接合部は丁寧にナデ消されている。

高坏（図版2-19） 高坏の脚部の破片。裾部は丸みを帯び、丁寧なミガキ（？）を施す。裾部の中央に浅い凹線を廻らせる。また縦位に、おそらく長方形になると考えられる透かしが2孔確認できる。脚部中央には横位のハケを2単位施す。胎土は緻密である。焼成は良好で、色調は暗青灰色を呈する。

高坏（図版2-17） 脚部、坏部を別造りし、のち接合しているものと考えられるが、極めて丁寧に調整が施されており、接合部を確認することはできない。脚部には沈線のための2方透かしを有する。胎土は緻密で、白色粒と黒色粒をわずかに含む。焼成は良好、全体に自然釉。色調は暗青灰色を呈する。

高坏（図版2-21） 坏部と脚部の接合部を明確に残す。坏部、脚部ともに轆轤成形、回転ナデ調整を施す。脚部には2方切り込みを有する。胎土は緻密で、白色の砂粒をわずかに含む。焼成は良好、色調は淡青灰色を呈する。

甗（図版3-24） 甗の頸部。口唇部も欠失している。轆轤成形、回転ナデ調整ののち、頸部中央に回転を利用して1条の沈線を施す。胎土は緻密であり、焼成は良好、色調は青灰色を呈する。

甗（図版3-27） 頸部を欠失。

長頸壺（図版2-15） 底部破片。長頸壺の底部と考えられる。轆轤成形、回転ナデ調整により造作する。回転ヘラ切り後、ナデ調整を施し高台部を接合する。高台部はやや裾開きで、接合部分は内湾する。胎土は1～2mm角の砂礫を多く含む。焼成は堅緻である。色調は白灰色を呈する。

長頸壺（図版2-18） 今回の調査中、鏡池畔から採集した資料である。長頸壺の底部になると考えられる。底面は回転ヘラ削りののち、高台部貼り付け。

長頸壺（図版2-20） 長頸壺の底部と考えられる。轆轤成形、回転ナデ調整後、糸切り。糸切り後は切り離しのまま、ナデ調整などは行わず高台部を貼り付け、高台部縁辺をナデ調整する。

長頸壺（図版3-22） 長頸壺。肩部以下を欠失する。頸部中央下でくびれ、口縁部に向かって大きく開く。頸部中央に2条の並行沈線を施す。内外面ともに回転のナデ調整を施す。内面の頸部と肩部の接合部付近に粘土の継ぎ足し痕になると考えられる段を有する。

長頸壺（図版3-23） 長頸壺の頸部。轆轤成形、回転ナデ調整による。頸部中央に2条の並行沈線を有す。欠失部直上には粘土継ぎ足の痕跡が認められ、長頸壺の頸部と胴部の接合部分に当たると考えられる。「八五」の墨書注記あり。

長頸壺（図版3-25） 長頸壺頸部。轆轤成形、回転ナデ調整。口縁部付近に1条の沈線、頸部中央に2条の並行する沈線を有す。

長頸壺（図版4-28） 長頸壺の胴部下半と高台部が残存。胴部には横ハケを有し、肩部はやや張る。高台部は裾開きである。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整を施し、そののちに高台部を貼り付けている。大谷分類の長頸壺3型ないし4型に分類される。

長頸壺（図版4-29） 頸部は長く外方へ立ち上がり、口縁部付近でやや内傾する。胴部下半にはヘラ削りを施している。

長頸壺（図版4-30） 長頸壺底部。白灰色を呈する。器表面に白色粒が多く認められる。胎土は緻密、焼成は良好である。轆轤成形、回転ナデ調整を行なう。胴部の器厚は7mm程度であるが、底部の器厚は20mm程度と厚くなる。底部調整は糸切りによる切り離しであると考えられる。底部ナデ調整の後、高台部貼り付けを行なっている。高台部は中央で大きく膨らみ、壺部との接合部分で窄まる。

長頸壺（図版4-31） 長頸壺底部。轆轤成形、回転ナデ調整後、底部糸切り。底部ナデ調整後、高台部貼り付け。高台部縁辺を再度ナデ調整。色調は外面が青灰色、内面が白灰色を呈する。

台付鉢ないし捏鉢（図版3-26） 重厚なつくりの捏鉢。器壁は最大厚で1.6cmを計る。轆轤成形、回転ナデ調整になり、口縁部はやや肥厚する。口縁部に1条、胴部に2条、胴部下半に1条の沈線を有する。底部は前面にハガレを呈しているため、当初は高坏の脚部と認識していた。焼成時の他の土器の圧着を剥がした痕跡の可能性も考えられるが不明である。

甗（図版5-33） 甗の口縁部破片。外傾する口縁端部をやや肥厚させ、その下に浅く太い凹線をめぐらせる。外面には叩き目、内面には青海波文の宛て具痕が残る。

甕（図版5-39）甕の口縁部破片。口縁部には回転ナデ調整の痕跡を残す。肩部外面に縄目叩き板、内面に青海波文の宛て具痕がある。口縁端部下7mmのところでは屈曲し、頸部を調整している。頸部上位には2条の浅い沈線が廻る。

甕（図版6-41）丸甕の胴部以下の破片。外面に叩き目、内面に青海波文を有する。色調は青灰色を呈し胎土は緻密、焼成は良好である。断面に5cm程度ずつの粘土帯が認められる。外面にはその粘土帯に沿って、横位のナデが施される。

甕（図版6-42）丸甕の胴部以下の破片。甕（第6図41）の資料に酷似する。

甕（図版7-48）甕の頸部破片。外面頸部はナデ調整、外面肩部以下は叩きである。内面には青海波文になる宛て具痕が認められる。

大甕（図版5-34）甕の口縁部から胴部の破片。口縁端部は上方へ屈曲し、二重口縁様を呈する。

大甕（図版5-35）甕の口縁部破片。頸部は短く、肩部の広がり大きい。

大甕（図版6-43）甕の胴部下半から底部の破片。底部外面に須恵器片が圧着、同部位の内面には自然釉がかかり、火膨れしている。内外面叩き調整、内面の宛て具痕は青海波文を呈する。

大甕（図版6-44）甕の胴部破片。法量は不明である。

大甕（図版6-45）大甕口縁部の破片。頸部に2単位の波状文帯と4条の沈線がめぐり、内外面は回転ナデ調整、内面にはさらに胴部から口縁部方向へのハケ調整が施される。内面と破断面に黒色付着物が認められる。

大甕（図版7-46）甕の頸部破片。外方へ大きく開く。4条の沈線の間に3つの波状文帯を施す。

大甕（図版7-27）大甕の頸部破片。頸部内側で内方へ強く屈曲する。頸部を作るために、肩部の上に粘土を積み上げる際に生じるもののようである。

大甕（図版8-50）大甕の肩部破片。3単位の粘土積み上げ痕が確認される。器壁が最厚部で1.4cmを測り、資料中でもっとも大型の甕になる。第8図49の資料と同型の甕になるものと考えられる。

大甕（図版8-51）大甕の頸部破片。断面に頸部と肩部の境になる粘土積み上げ痕が確認できる。

大甕（図版9-52）須恵器の大甕頸部破片。頸部の内側が内方へ強く屈曲する。外面に叩き目、内面に青海波文を有する。内外面ともに白灰色を呈し、胎土は緻密、焼成は良好である。

縄文土器 浅鉢（図版9-53）口縁部資料で、口径約22cmの緩やかに内湾する深鉢片であると考えられる。胎土は黄橙色を呈し、砂粒と雲母片を少量含んでいる。器壁厚は約7mm～10mmで、内面に横方向の丁寧な磨きが施される。文様は口縁部が横位の沈線によって区画され、区画内には刺突列が並ぶ。刺突文は径5～6mmの円形で、先端が丸味を持つ施文具ではほぼ正面から施されている沈線による弧状の懸垂文や縦位の懸垂文が描かれて、区画内の磨きは丁寧ではなく、一部に凹凸が見られる。弧状懸垂文の下部からは、部分的に微隆起線による懸垂文が確認される。地文には縄文Lが充填される。内外面ともに炭化物の付着は認められない。本資料は、縄文時代中期末葉～後期初頭に位置づけられる。

縄文土器 浅鉢（図版9-54）深鉢の胴部資料であると考えられる。胎土は黄橙色を呈し、砂粒と2mmほどの小礫と石英を微量に含む。器壁厚は6mm～11mmで、内面には縦方向の磨きが施される。文様は、地文に縄文LRを施した後に、沈線による曲線的な文様が描かれる。沈線は幅約2.5mm～3mmである。外面にはススが附着するが内面には炭化物の付着は認められない。本資料は、縄文時代後期前半期の資料であると推定される。

土馬（図版11-56）須恵質で焼成は良好、胎土は細かな砂粒を含み、堅緻。色調は赤褐色を呈するが、腹部器表面は茶褐色に変色している。1塊の粘土塊から前肢、後肢を摘み出して成形している。腹部および脚部にヘラ削りと考えられる工具痕を残す。また脚部先端には指頭痕が認められる。体部は頭部および両前肢、右後肢を欠失し、性器表現は有さない。

土製支脚（図版10-55）三叉突起を有す土師質の支脚で、色調は黄褐色、胎土はやや粗く、焼成はやや不良。器表面の風化が著しく、細かい調整は不明であるが、手捏ねとヘラ削りにより成形を行なっている。

土師器（図版4-32）土師質の壺。淡い橙褐色を呈し、胎土は精緻であるが焼成はやや不良。成形後、頸部付近に粘土を継ぎ足し、内面底部方向へ折り曲げている。器表面を軽く磨くが、ややあばた状を呈する。胴部に剥離が認められ、穿孔を試みた痕跡と考えられる。

播鉢（図版9-52）備前の播鉢。近世の所産と考えられる。

図版 番号	番号	器種	器高 (mm)	口径 (mm)	底径 (mm)	最大幅 (mm)	備考
1	8	高台坏	49	138	110		
1	9	壺	375	96	60	99	
1	11	坏	37	108			
1	2	蓋	475	99	42 (高台部)		短頸壺の蓋か
1	3	坏蓋	31	149			
1	1	坏蓋	30	167			
1	4	坏蓋	44	135.5			
1	6	坏蓋	30	149			
1	7	坏					
1	12	坏	54	142	92		
1	10	坏	50				
1	5	坏蓋	25				
2	16	坏	43	151			
2	20	高台坏			94		
2	19	高坏	(56)		100	106	脚部
2	17	高坏	(85)		73		
2	21	高坏			94		
2	13	坏	46	119	74		
2	15	長頸	370		75		底部か
2	14	高坏	85	90	74		
2	18	長頸壺			80	133	採集資料
3	26	捏鉢	(126)		138		
3	24	壺	(44)	(61)			頸部
3	25	壺				10	頸部
3	22	長頸壺	(150)	85			
3	27	觚	79		46	89	
3	23	長頸壺	102	87			
4	30	長頸壺			80	162	
4	31	長頸壺			90	151	
4	28	長頸壺			83 (高台部)	147	
4	29	長頸壺	204	80	85		
4	32	土師質壺	(64)			138	土師器
5	39	甕	77	182			
5	33	大甕	(170)	160			
5	40	大甕	78	180			佐草宮司宅保管資料
5	36	大甕	87	260			佐草宮司宅保管資料
5	35	大甕	74	222			佐草宮司宅保管資料
5	38	大甕		172			佐草宮司宅保管資料
5	34	大甕	192	178			佐草宮司宅保管資料
5	37	大甕	59	200			佐草宮司宅保管資料
6	41	大甕	(199)			245	
6	43	甕	175				
6	44	大甕					
6	42	大甕	180				
7	48	甕	39	103	70		
7	47	大甕					
7	46	大甕					佐草宮司宅保管資料
7	45	大甕					
8	49	大甕					
8	51	大甕					
8	50	大甕					
9	53	深鉢(縄文土器)	(68)	220			縄文土器
9	54	浅鉢(縄文土器)					縄文土器
9	52	擋鉢	111	284	146		
10	55	支脚	180			130.5	
11	56	土馬	73			52	

第1表 八重垣神社資料観察表

第2節 八重垣神社境内地測量調査

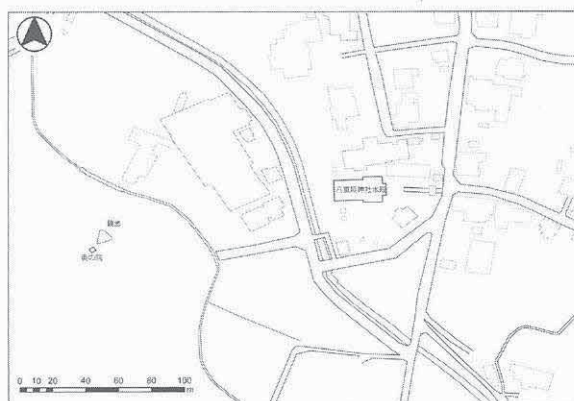
測量調査の方法と成果

測量範囲は八重垣神社境内鏡池周辺である。八重垣神社と鏡池の位置関係を示したものが第5図、鏡池周囲を測量した図が第6図である。

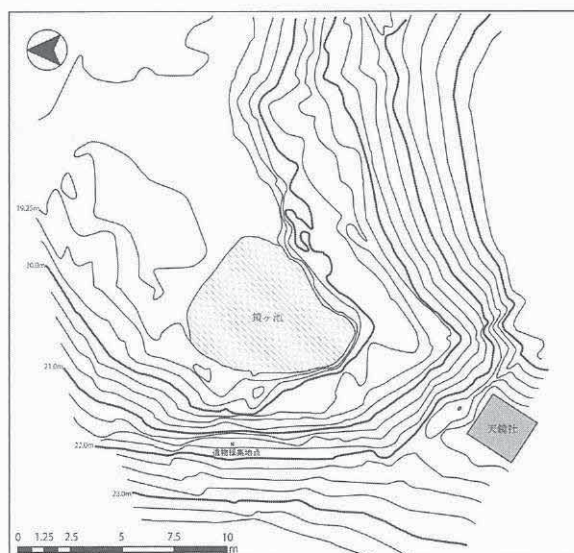
調査にあたっては神社境内地に任意の基準点を設置し、国土地理院街区三角点(第32001号)より境内地内基準点まで水準測量を行った(基準点は境内景観保全のため、調査終了後撤去した)。観測はトータルステーション(TOPCON GPT-3005W)を用いて地形の傾斜変換点を想定しランダムに座標値・標高値を測り、ArcGIS(Ver9.3)3D Analystで等高線を作成した。

奥院は八重垣神社本殿から西方への緩斜面を降った最奥部、社殿南西側丘陵の南に突き出た尾根の北東傾斜面に位置している。さらに鏡池の西端が丘陵への変換点となって立ち上がり、これは東の大庭町方面、西南の東忌部町へ連なる。奥院入口には夫婦椿、鏡池脇には夫婦杉はじめ、樹木が生い茂り、鏡池の南西斜面には天鏡社が鎮座し、社叢を形成している。鏡池は南北7.5m、東西6.5mを測る。水深は水中に防犯上の網があることなどから測量不可能だが、佐草宮司によると、成人の腰部ほどの深度であるという。南西の斜面を背後に控え、北東には護岸の目的を兼ねた敷石による平坦面が広がる。周辺の地形には樹木の根株が露呈し起伏が見られることから、この平坦面には若干の地形改変が加えられたものと考えられる。今回調査した資料もこの工事と関連する改浚により出土したものであると考えられる。参拝者は、この平坦面から半紙の上に小銭を乗せて銭占を行っている(第7図)。また鏡池北端からは水路が北方向へ伸びている。東・西・南方向は斜面が池外周にかけて途切れ、ここに瑞垣が圍繞し、瑞垣の外側を通路状の平坦面がまわっており、天鏡社への参拝道となっている。

また測量調査中に長頸壺破片(図版2-18、写真図版2)を鏡池の西、天鏡社への参道脇の斜面で採集した。



第5図 八重垣神社周辺地図
(国土地理院発行の基盤地図情報を基にGISを用いて作成。)



第6図 鏡池周辺地形測量図



第7図 鏡池と参拝者

第4章 まとめ

以上、八重垣神社所蔵の鏡池および周辺地から出土したとされる資料について報告を行なった。発掘調査によらない資料であるため、その性格付けには困難を伴うが、資料の年代把握を中心として周辺の歴史的背景を踏まえ、まとめとしたい。

資料は須恵器がその大多数を占める。その中でも甕が最も多く、19点であった。接合関係の確認作業の結果、それぞれ別個体と考えている。内面の当て具痕は全て青海波文である。次いで坏が8点で、うち高台付坏は2点あった。さらに坏蓋5点、高坏が4点である。特徴的なのは長頸壺で、底部のみのものが多数であったが計8点あった。先学による須恵器の編年研究⁽¹⁾に則ると、これらの資料は、坏蓋（第1図4）は肩部に稜線を有し、口縁端部の内側に段を有する。大谷分類のA3a型で出雲4期、長頸壺（第4図29）は口縁部が直行し、肩部がやや張るタイプで、大谷編年の出雲6期に位置づけられる。

鏡池遺跡の評価

最後に、ここまで行ってきた報告をもとに鏡池遺跡の評価を試み、まとめとしたい。まず縄文土器はわずか2点であることや出土状況が不明なことから、その位置づけは困難である。また歴史的環境の項でも述べたとおり、周辺に縄文時代の資料は大橋川周辺に後期の遺跡が2箇所確認されているものの、その時期も縄文時代中期末～後期と考えられる八重垣神社資料と合致せず、佐草町内に縄文時代遺跡は確認されておらず様相は不明である。また、浅鉢（第9図53）の口縁部に認められる円形の刺突文は特徴的な資料である。縄文土器については今後、資料の増加を待って検討されるべきであろう。

古墳時代に入り、意宇平野には大小の古墳が、丘陵部には横穴墓が造営され、多くの遺跡が確認されるようになると、八重垣神社資料も軌を一にするようにその数が増加する。鏡池から出土したとされる資料について、今回の調査の際、鏡池の畔で須恵器片を採集したことから、そのすべてではないにせよ、出土位置については概ね鏡池出土と評価されるものと言える。また、資料は縄文土器と播鉢を除けば、時期は最も古い坏蓋の6世紀後半から7世紀代の比較的短期間に収まることが確認された。これらの資料と同時期の須恵器を出土する祭祀遺跡の事例は、松江市前田遺跡、東出雲町春日シヌン谷遺跡などが知られ、6世紀後半から7世紀にかけて、意宇郡をはじめとする東部出雲では多くの祭祀遺跡が確認され、鏡池遺跡もこの時期のみ鏡池をめぐって土器の投供が行われた遺跡として考えたい。一方で7世紀に祭祀に須恵器を用いる事例は少なく、大場の言うように水霊に係る信仰觀念の痕跡との見解を直ちに首肯する根拠には乏しい。さらに6世紀後半の坏蓋1点（第1図4）には骨滲みとも考えられる白色物が付着していること、詳細は不明であるが附近に八重垣神社裏横穴が存在することから、横穴の副葬品であった資料が含まれている可能性もある⁽²⁾。

土馬（第10図56）は須恵質で、馬具の表現は持たない。頭部を欠失しているが、尾部の表現、成形などから出雲地方東部の土馬と捉えることができる。復元全長は10cm内外になると考えられ、内田分類⁽³⁾による中型の土馬である。須恵質の土馬は島根県に多く認められ、特にその大部分が旧嶋根郡・意宇郡域で出土している。大井窯跡群では土馬が出土しており、八重垣神社土馬に形態の酷似する山津1号窯灰原出土土馬は6世紀後半から末の須恵器と相伴している。地理的位置、また胎土などから、八重垣神社土馬も大井窯跡群で製作されたものと考えられる。八重垣神社の須恵器の年代が7世紀代に収まるとは、山陰地方において土製支脚が6世紀末に出現することや、出雲東部では須恵質で馬具を有しない土馬が7世紀代に盛行することと併せて考えても、整合すると言える。従って、鏡池遺跡は6世紀後半から7世紀後半にかけて、須恵器の投供、土馬を用いた祭祀が行なわれた場であったと考えられる。ただし、池に対しての須恵器の投供という行為の意味、土馬を用いた祭祀について、また、八重垣神社境内地一帯が須恵器を用いた祭祀の場となっていた可能性については関連資料との比較など引き続き検討する必要がある。

さらに国府・国分寺等が設置される古代以降の当該地域の隆盛はここでは詳細を記すまでもないが、これらの

設置時期以降、近代に至るまで鏡池に関する祭祀や占いなどの痕跡や資料は現在のところ見出せていない。現状では、鏡池に対する信仰は、祭祀として行なわれていなかった時期もあったと想定され、池にまつわる言い伝えや伝承が継続する土地柄である環境において、信仰や占い行為は長期的には継続的、短期的には断続的に行なわれる状況にあり現在に至ったと考えられる。

註

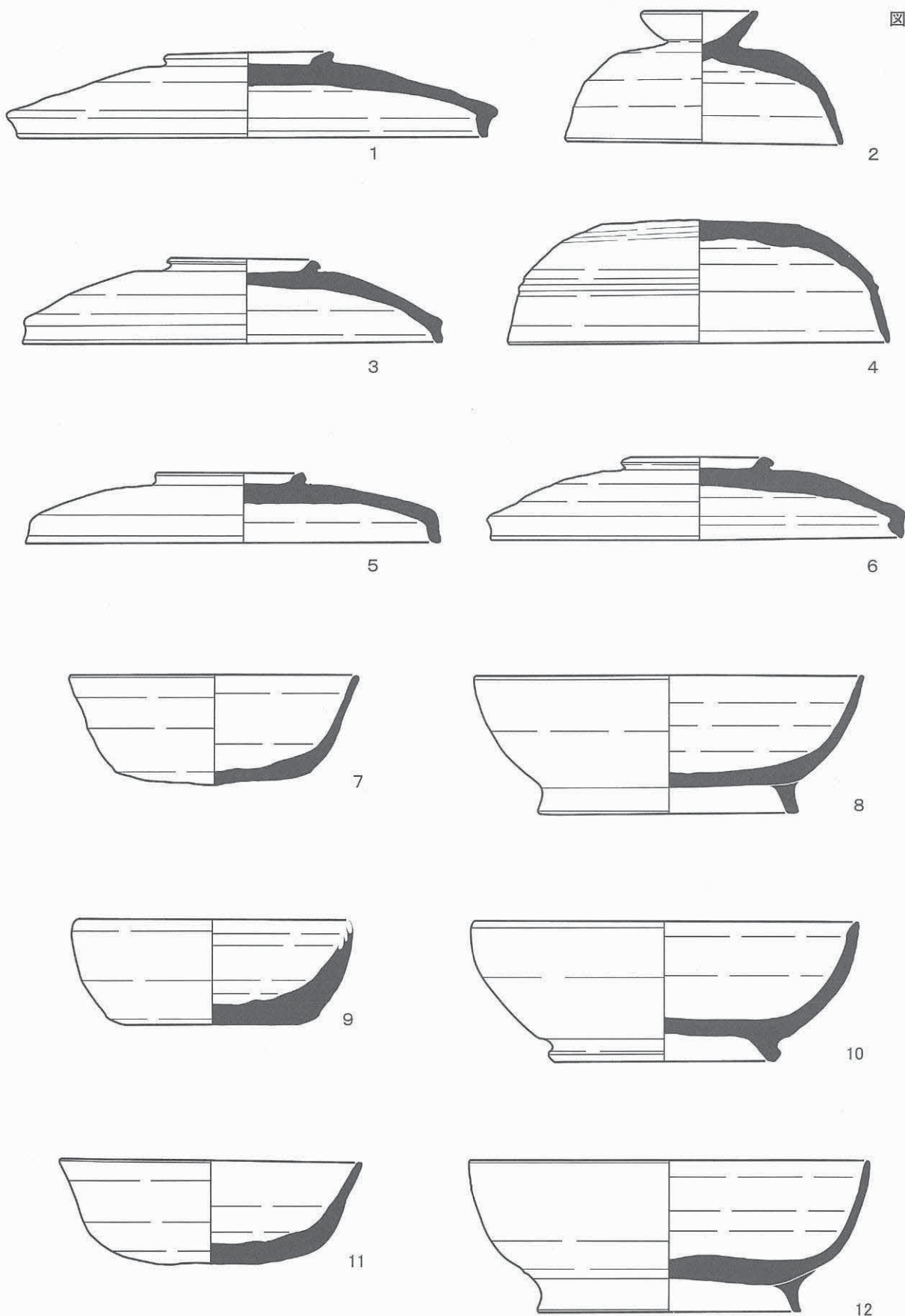
- (1) 柳浦俊一1980「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』3 松江考古学談話会
大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会
- (2) 西尾克己氏の教示による。
- (3) 内田律雄・岩橋康子・藤原 哲2005「山陰地域の土馬集成」『島根考古学会誌』第22集 島根考古学会

参考文献

- 大場磐雄1935a「池中の鏡（一）」『歴史公論』第4巻第8号 雄山閣
大場磐雄1935b「池中の鏡（二）」『歴史公論』第4巻第9号 雄山閣
山本 清1960「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』島根大学
草光 繁1962「地形」『新修松江市誌』松江市
山本 清1968「荒神谷・後谷古墳群」『島根県文化財調査報告書』第5集 島根県教育委員会
山本 清1975「古墳（未発掘古墳）」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会
大場磐雄1976『楽石雑筆（中）』（大場磐雄著作集7）雄山閣
柳浦俊一1980「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』3 松江考古学談話会
松本岩雄・柳浦俊一1991「山陰」『古墳時代の研究』6 雄山閣
大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会
柳浦俊一1995「出雲における須恵器の生産・流通と特質」『風土記の考古学』3 出雲国風土記 同成社
角田徳幸1995「出雲の後期古墳文化と九州」『風土記の考古学』3 出雲国風土記 同成社
西尾克己1995「古墳・横穴墓からみた古代社会—6、7世紀の出雲東部と西部の様相—」『風土記の考古学』3 出雲国風土記 同成社
山本 清[監]1995『島根県の地名』平凡社
大谷晃二1997『『出雲国』の支配者たち—出雲の後期古墳文化—』『古代出雲文化展』島根県教育委員会・朝日新聞社
おおばの歴史編纂委員会1998『おおばの歴史』松江市大庭公民館
石塚尊俊2000『出雲国神社史の研究』岩田書院
岩橋孝典2003「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について—土製支脚・移動式竈を中心として—」『古代文化研究』第11号 島根県古代文化センター
仁木 聰2003「各地の終末期古墳—出雲」『季刊考古学』第82号 雄山閣
藤原 哲・秦 愛子2004「出雲地域における窯跡出土の須恵器—大井古窯跡群における6世紀末～8世紀の資料を中心に—」『島根考古学会誌』第20・21集合併号 島根考古学会
内田律雄・岩橋康子・藤原 哲2005「山陰地域の土馬集成」『島根考古学会誌』第22集 島根考古学会

発掘調査報告書

- 山本 清1975「古墳（未発掘古墳）」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会
石塚尊俊[編]1975『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会
山本 清1968「荒神谷・後谷古墳群」『島根県文化財調査報告書』第5集 島根県教育委員会
江川幸子[編]1981『史蹟出雲国山代郷正倉跡』島根県教育委員会
丹羽野裕1992「4.遺物」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅷ—山代二子塚古墳—』島根県教育委員会
松本岩雄・池淵俊一[編]1993『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅸ—山代郷正倉跡・山代方墳』松江市教育委員会
柳浦俊一・日高 淳[編]1997『福富Ⅰ遺跡 屋形1号墳』島根県教育委員会 建設省松江国道工事事務局
間野大丞[編]1997『松本古墳群 大角山古墳群 すべりざこ古墳群』島根県教育委員会 建設省松江国道工事事務所
広江光洋[編]2001『奥山古墳発掘調査報告書』松江市教育委員会（財松江市教育文化振興事業団）
柳浦俊一・野々村安浩[編]2002『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書13 来美廃寺』島根県教育委員会
江川幸子[編]2002『市道真名井神社線整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会（財松江市教育文化振興事業団）
角田徳幸・守岡正司ほか[編]2003『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書14 史蹟出雲国府跡1』島根県教育委員会
落合昭久[編]2005『田和山遺跡』松江市教育委員会（財松江市教育文化振興事業団）
藤原 哲[編]2006『大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』（松江市文化財調査報告書第104集）松江市教育委員会
江川幸子・石川 崇・秦 愛子2006『洪ヶ谷遺跡群発掘調査報告書』松江市教育委員会（財松江市教育文化振興事業団）
瀬古諒子[編]2006『向山西遺跡』松江市教育委員会（財松江市教育文化振興事業団）
島根大学法文学部考古学研究室2008『大井窯跡群表採資料の報告』（島根大学考古学研究室調査報告第9冊）

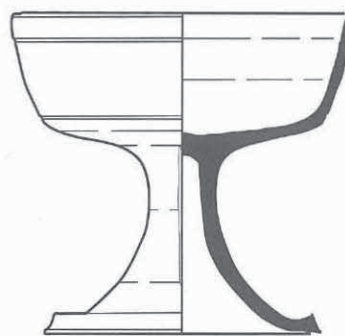


0 (S = 1/2) 5cm

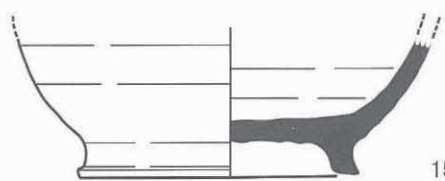
八重垣神社資料実測図 1



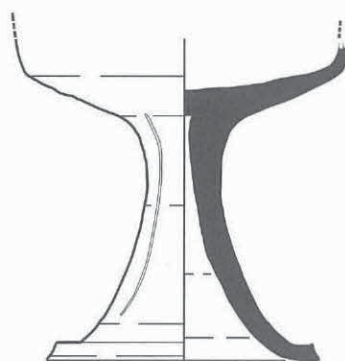
13



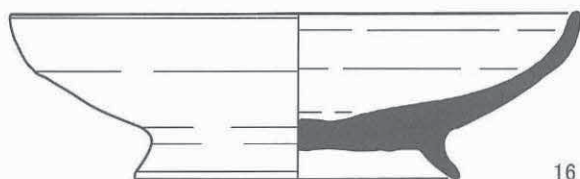
14



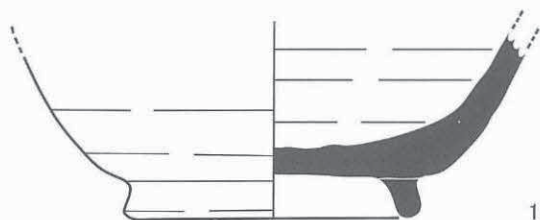
15



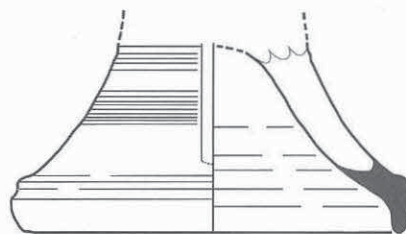
17



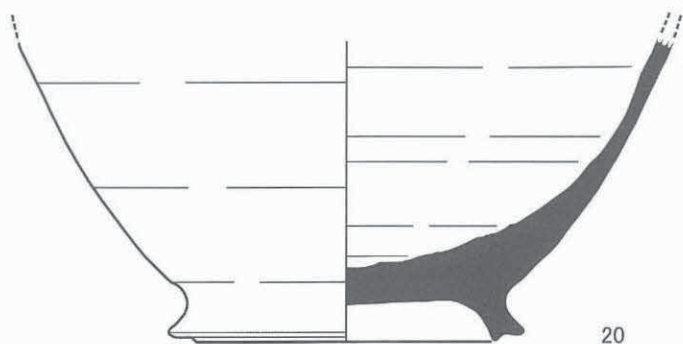
16



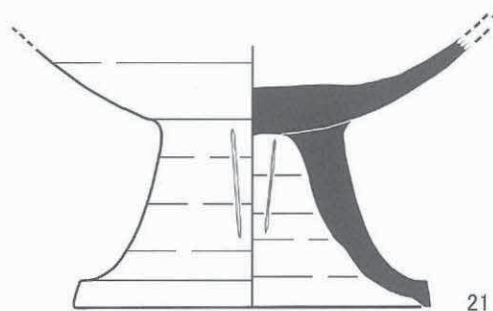
18



19

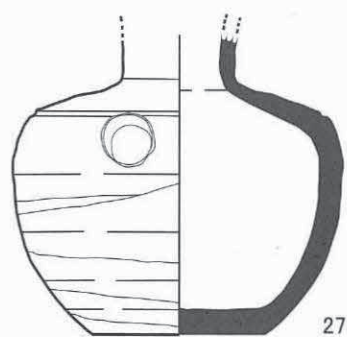
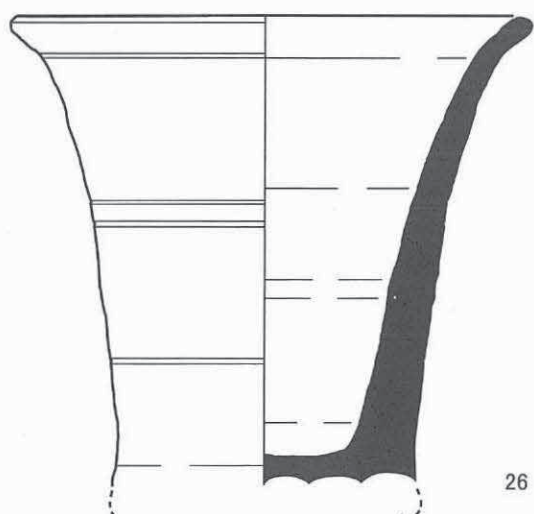
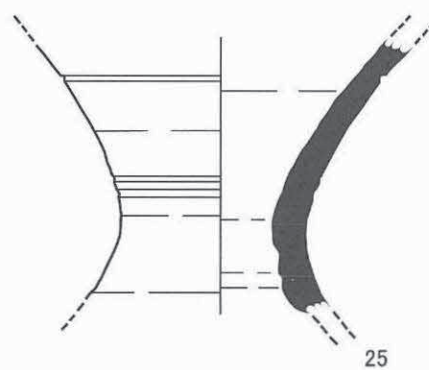
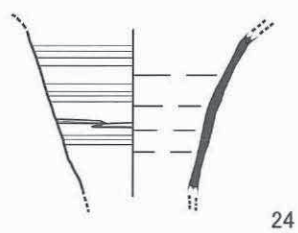
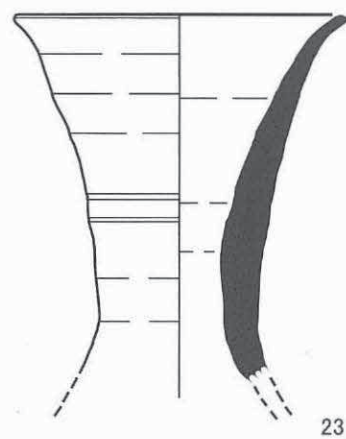
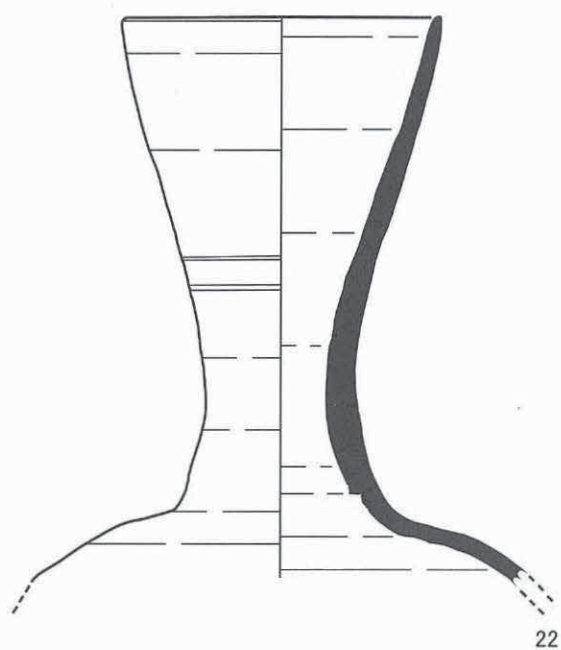


20

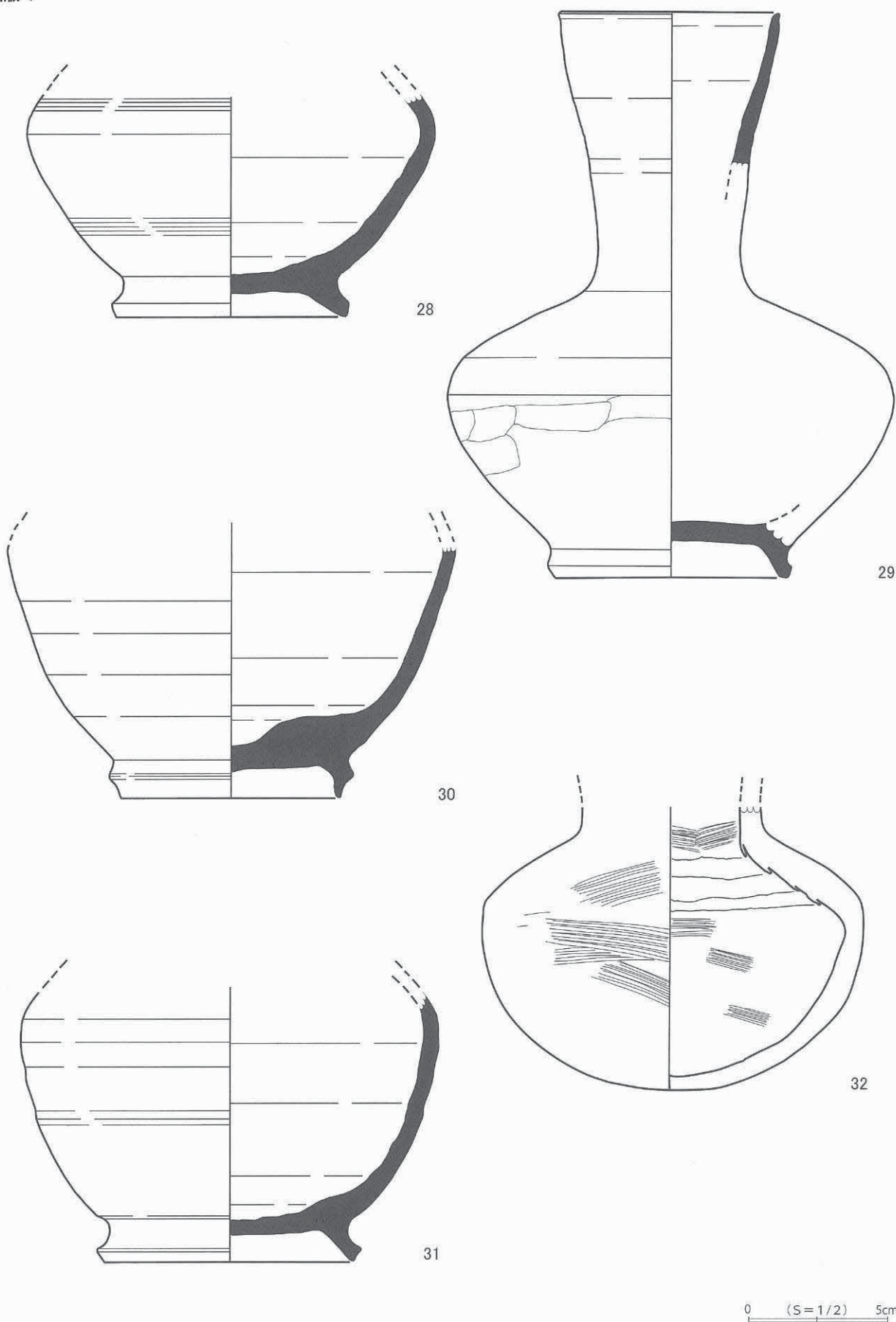


21

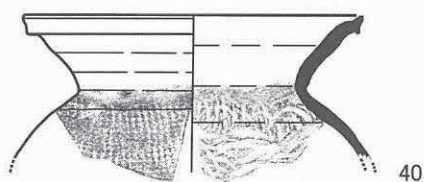
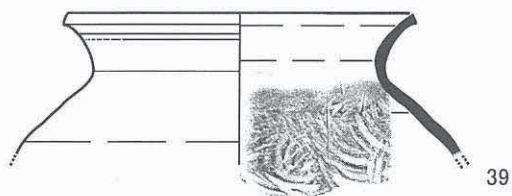
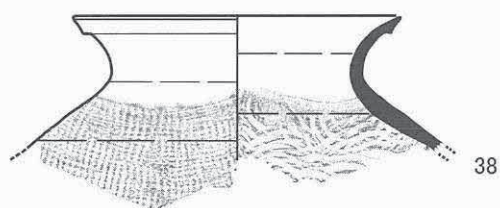
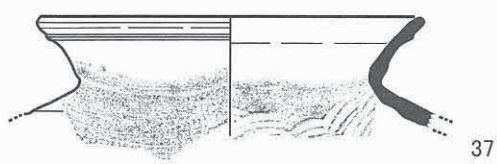
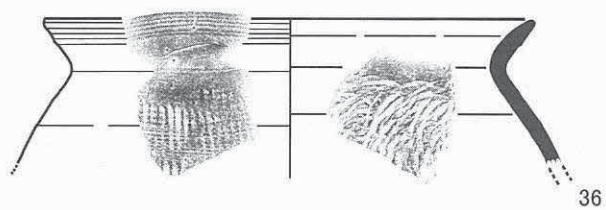
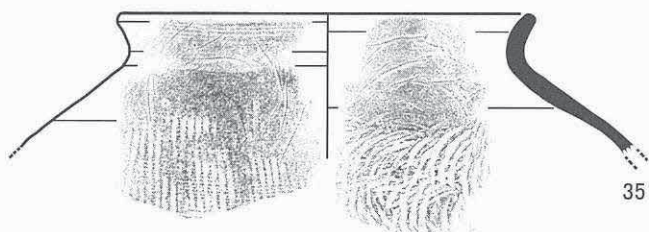
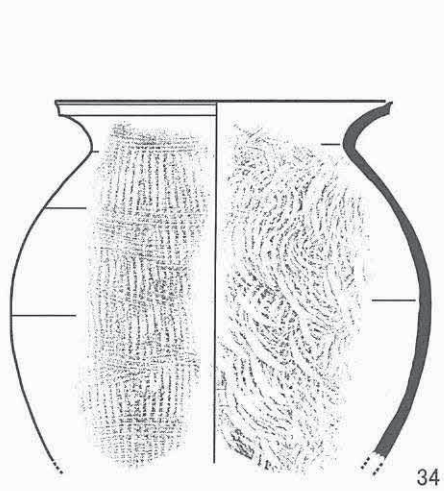
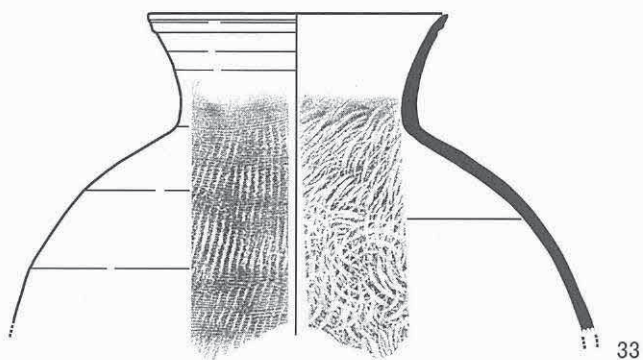
0 (S=1/2) 5cm



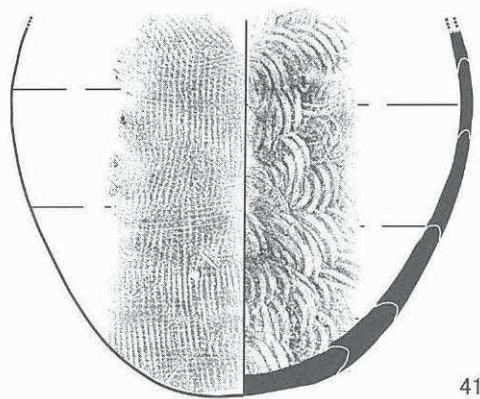
0 (S=1/2) 5cm



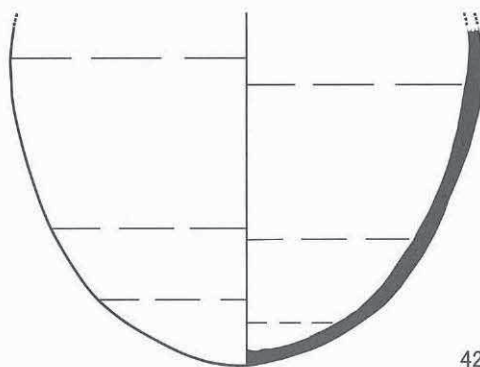
八重垣神社資料実測図 4



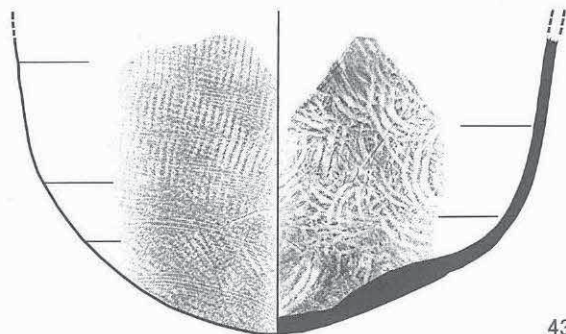
0 (S = 1/4) 10cm



41



42



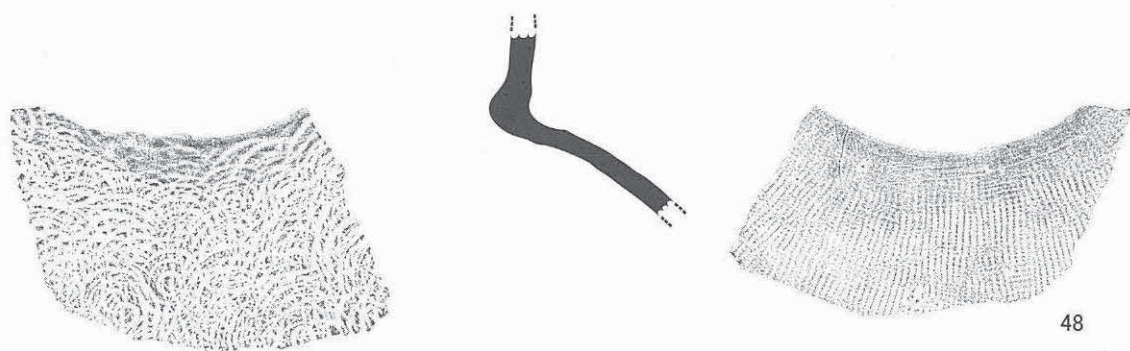
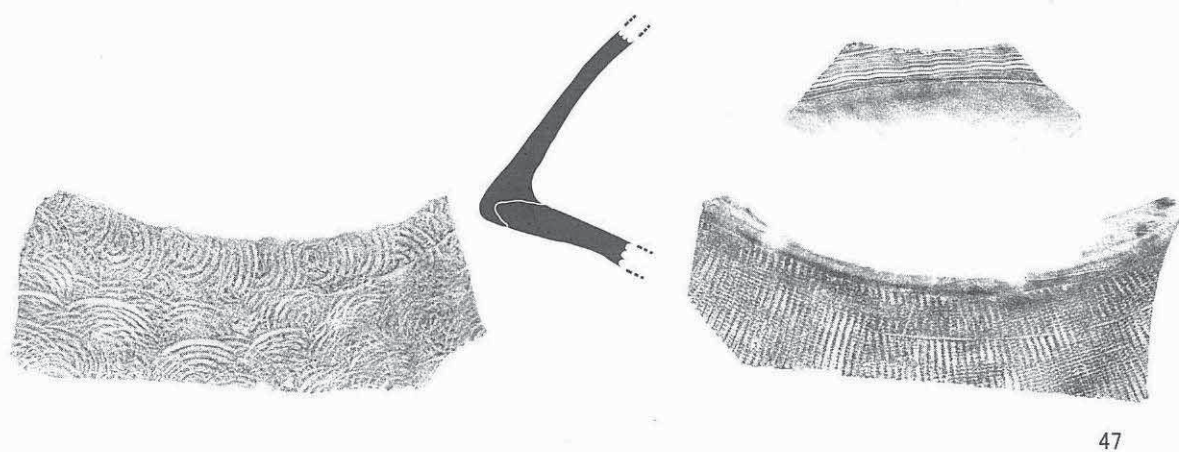
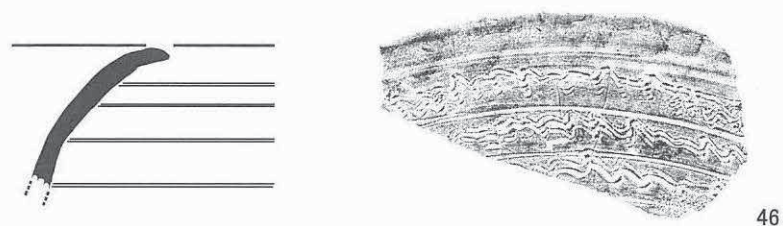
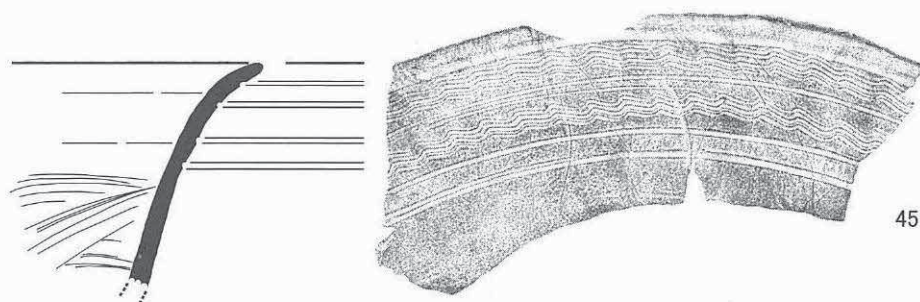
43



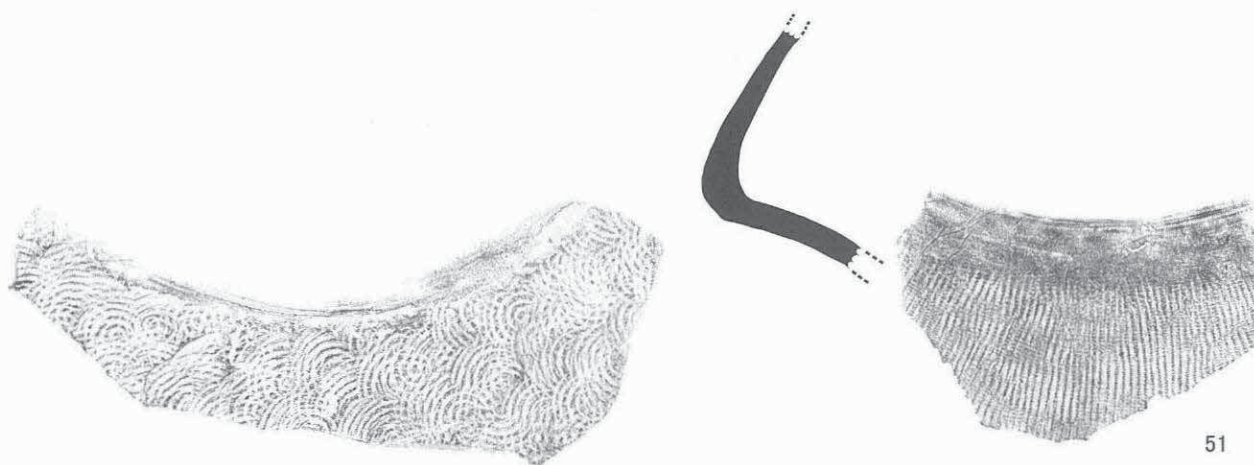
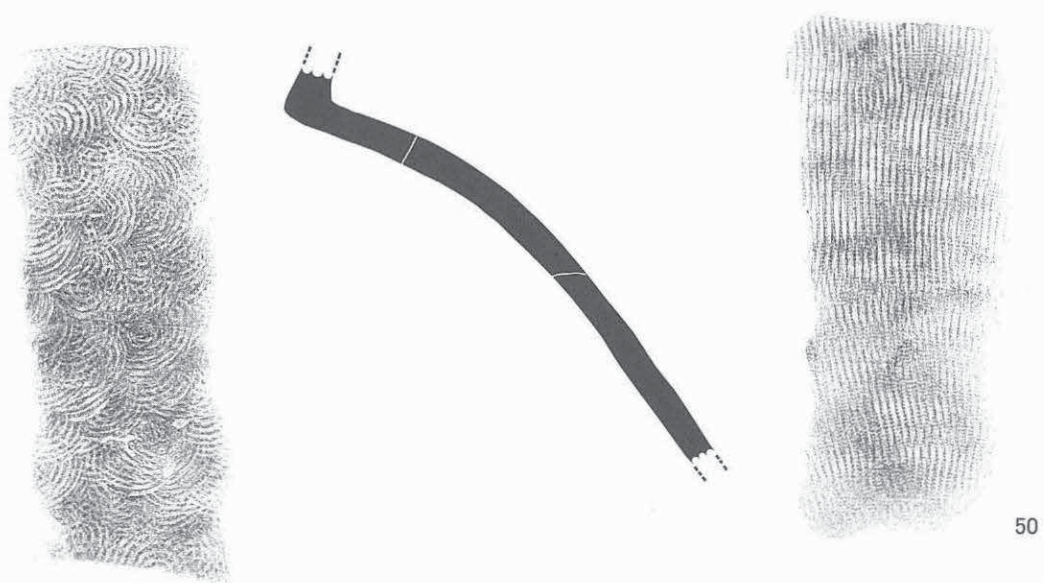
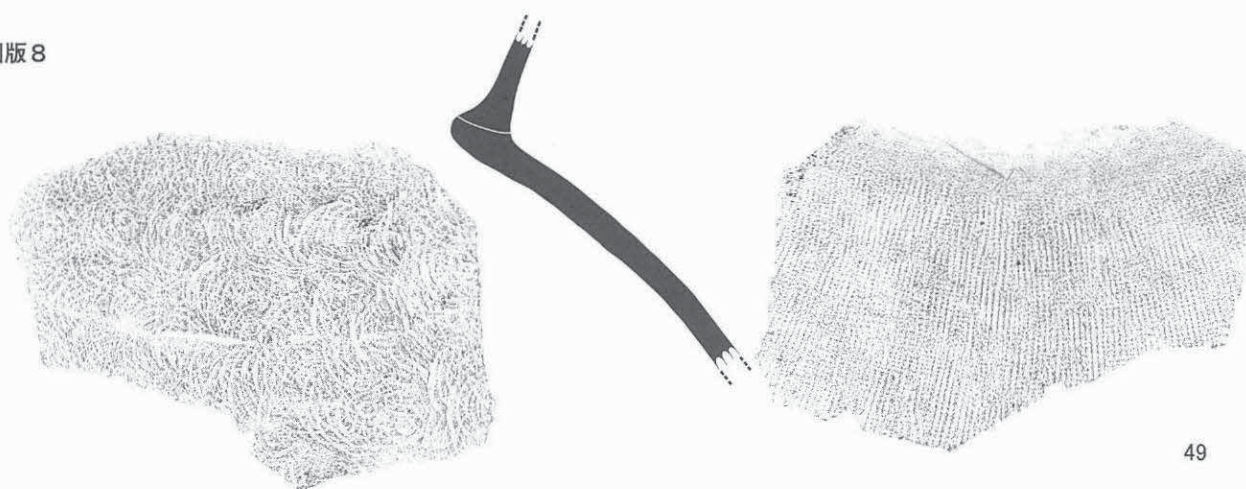
44

0 (S = 1/4) 10cm

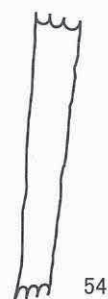
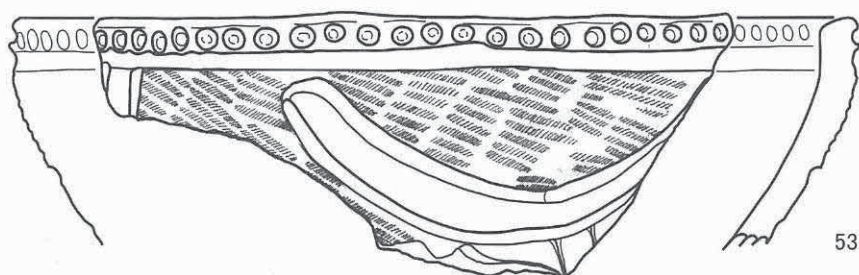
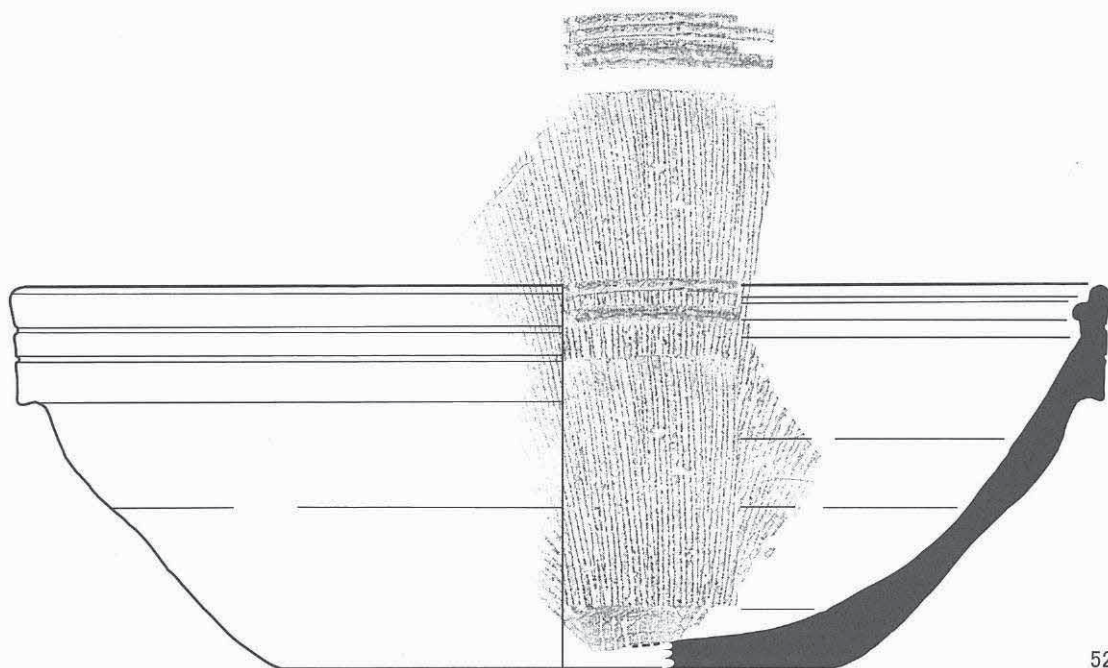
八重垣神社資料実測図 6

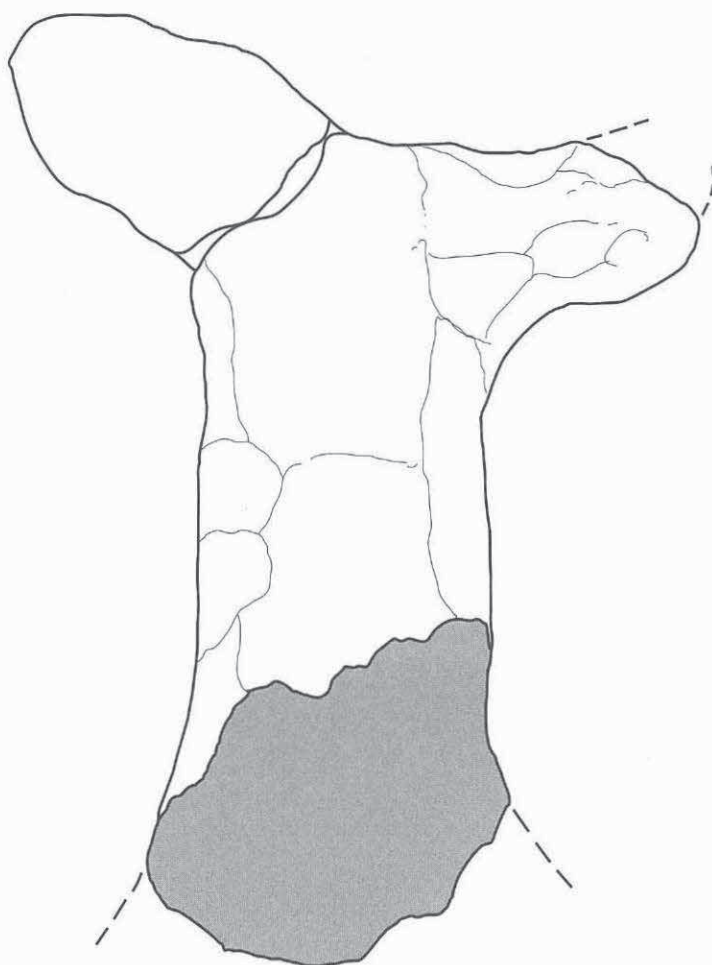
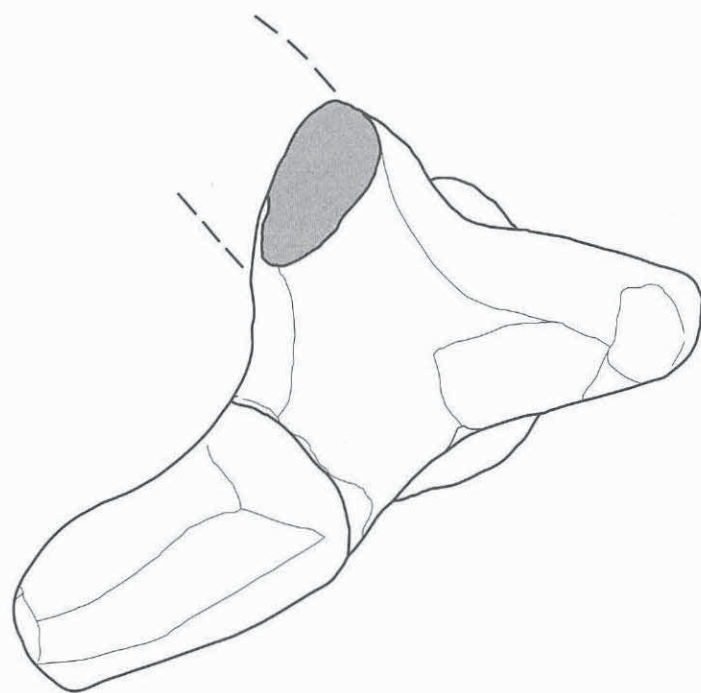


0 (S = 1/4) 10cm



0 (S = 1/4) 10cm

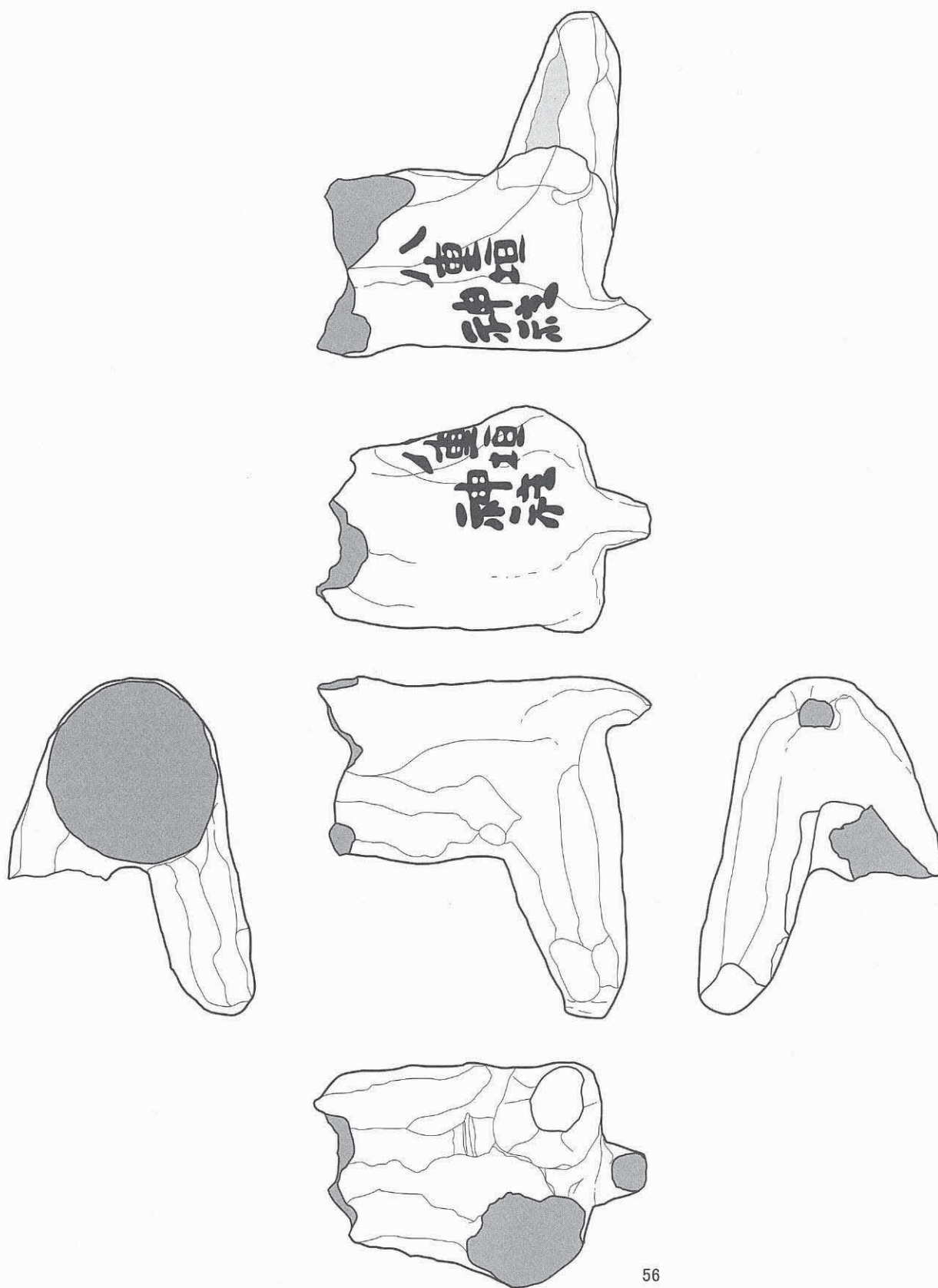




55

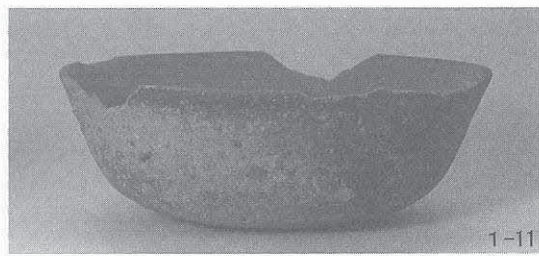
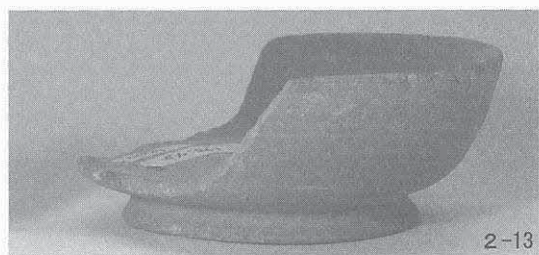
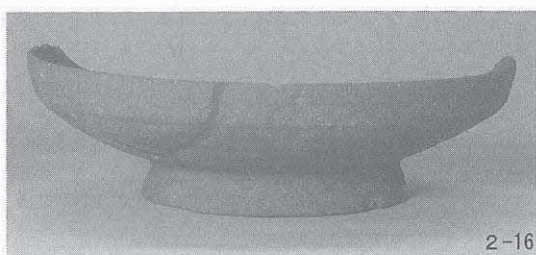
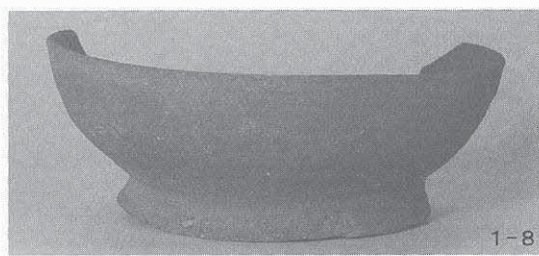
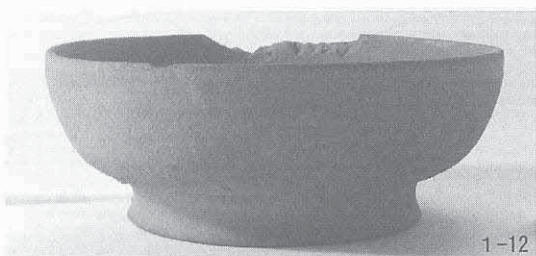
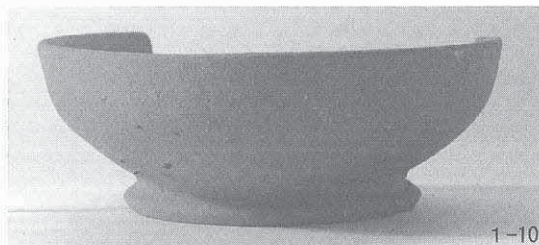
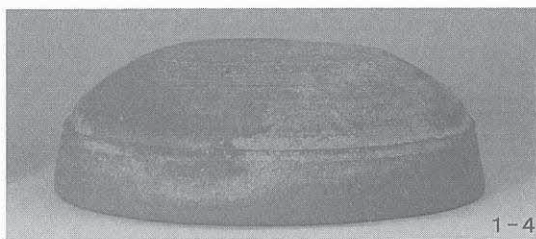
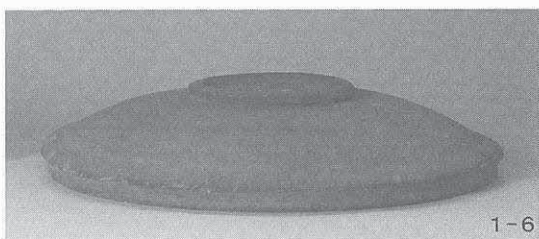
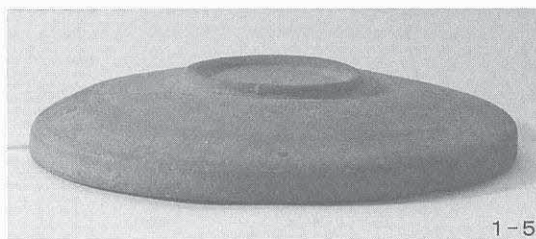
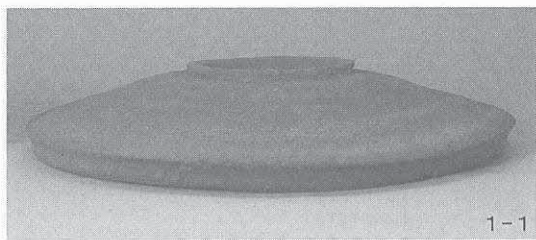
0 (S=7/10) 5cm

八重垣神社資料実測図10



0 (S=4/5) 5 cm

八重垣神社資料実測図11

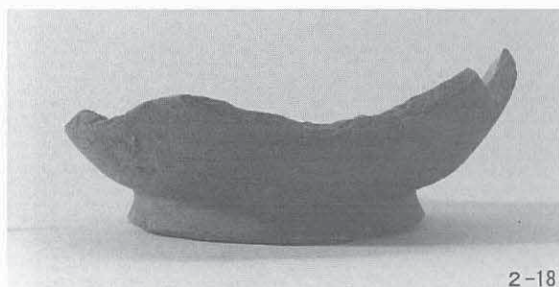




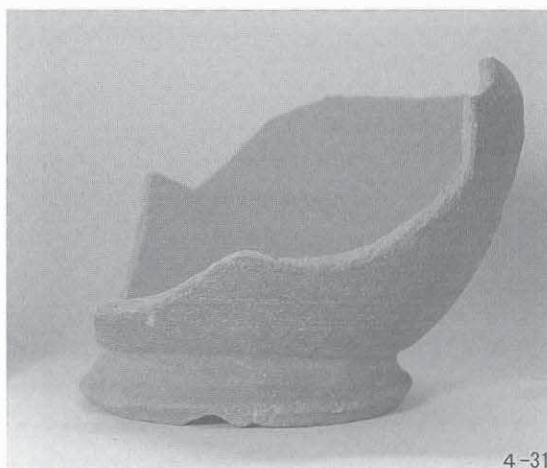
4-29



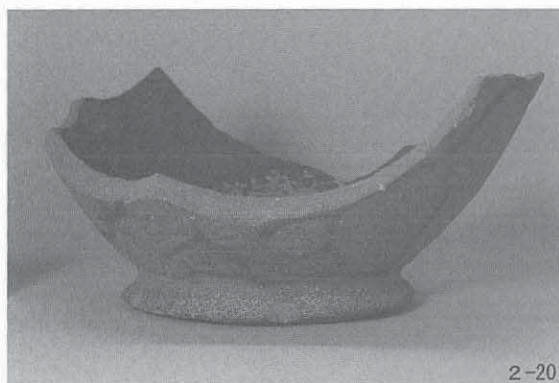
3-26



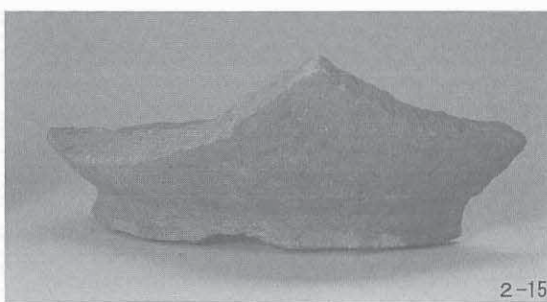
2-18



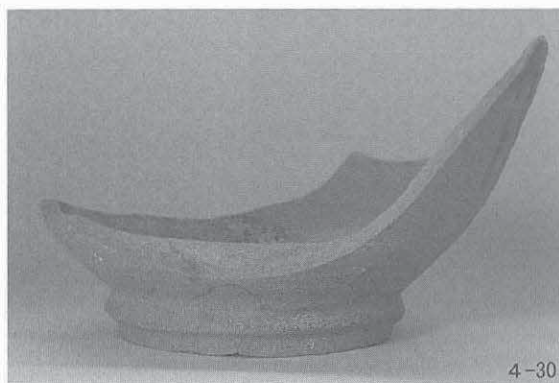
4-31



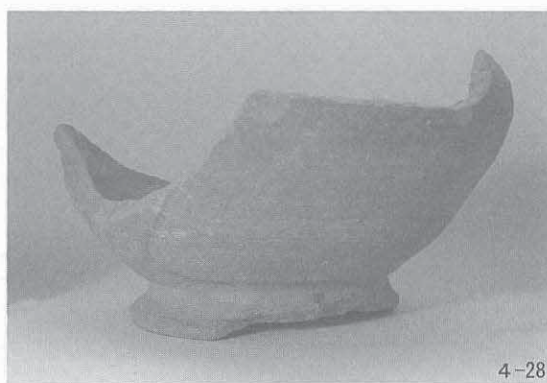
2-20



2-15

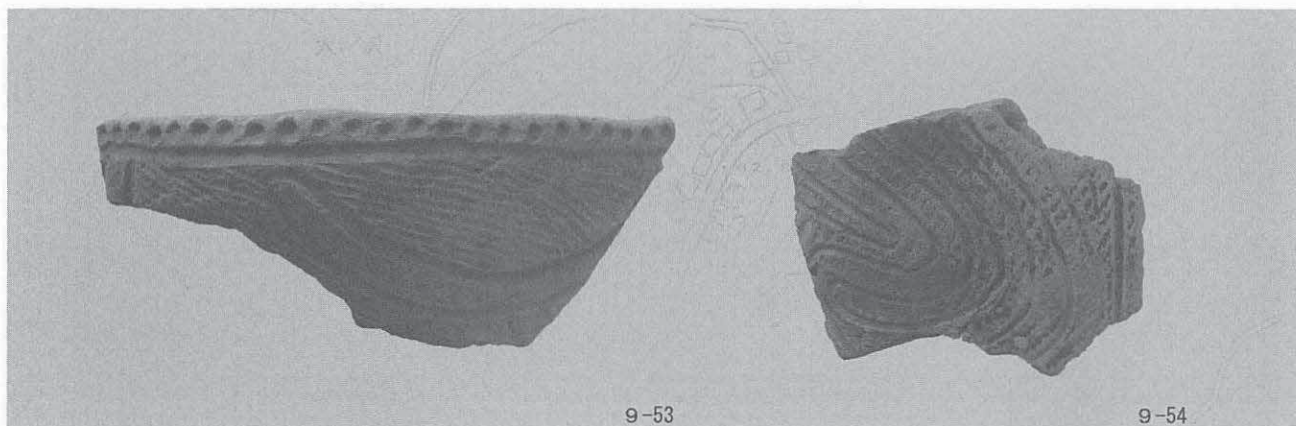


4-30



4-28





9-53

9-54



10-55



11-56

八重垣神社資料写真 5